

42507

教科書文庫

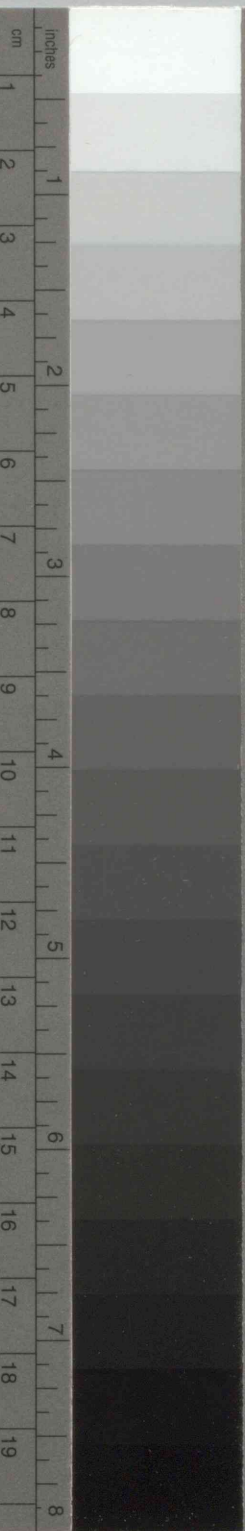
| |
|-----------------|
| 4 |
| 810 |
| 44-1941 |
| 20000. 26462 |

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



教科書文庫
4
810
44-1941
2000026462

帝國實業讀本
改制新版
卷八



教育部省檢定
實用學校國語科用

昭和十六年十月三日

教科書文庫
4
810
44-1941
2000026462

帝國實業讀本

改制新版

文學博士 芳賀矢一 編
文學博士 上田萬年 訂補
文學士 長谷川福平

合資
會社 富山房發兌

広島大学図書

2000026462



資料室

315.9
H27

午早

也

神の代

日の本

國のつめ

立るこの山



安宅林雲鳳筆

廣島大學圖書印

広島大学
教
26462
圖書

帝國實業讀本 改制新版 卷八

目次

| | | |
|-------------|-------|---|
| 一 平安京 | 藤岡作太郎 | 一 |
| 二 百蟲譜 | 横井也 | 六 |
| 三 落葉を焚く歌(詩) | 河井醉茗 | 二 |
| 四 若き友よ | 永井潜 | 三 |
| 科學と人生(自修文) | 永井潜 | 〇 |
| 五 熊野落 | (太平記) | 六 |
| 六 詩人西行 | 藤岡作太郎 | 三 |
| 七 枯野(古俳句) | | 四 |
| 八 十六夜日記 | 阿佛尼 | 三 |

目次

一

| | | |
|---------------|--------|---|
| 九 生活の基礎 | 木村泰賢 | 四 |
| 町人諭吉(自修文) | 太田正孝 | 五 |
| 一〇 長柄堤の訣別(脚本) | 坪内逍遙 | 六 |
| 二 光頼卿の参内 | (平治物語) | 七 |
| 三 漁夫 | 和辻哲郎 | 七 |
| 青年よ偉大なれ(自修文) | 永田秀次郎 | 八 |
| 三 小野の御室 | (伊勢物語) | 八 |
| 四 方丈記その一 | 鴨長明 | 九 |
| うたかた | | 九 |
| 安元の大火 | | 九 |
| 治承の辻風 | | 九 |
| 三 方丈記その二 | 鴨長明 | 九 |
| 都うつり | | 九 |

| | | |
|-------------|-----|----|
| 養和の飢饉 | | 九 |
| わづらひ | | 一〇 |
| 六 方丈記その三 | 鴨長明 | 一〇 |
| 閑居 | | 一〇 |
| 七 揚雲雀(古俳句) | | 一〇 |
| 八 安宅(謡曲)その一 | | 一〇 |
| 九 安宅(謡曲)その二 | | 一〇 |
| 三〇 強い精神の勝利 | 永井潜 | 一〇 |



帝國實業讀本 改制新版 卷八

一 平安京

藤岡作太郎^(一)

日本は世界の樂土なり。東亞のイタリ一なり。山川の風景往く所として佳ならざるなきが中に、殊に衆美を聚めたるを京都とす。京都附近の景は日本のすべての景をエキスにしたるもの。規模の雄大豪壯なるものは存せずと雖も、秀麗幽婉の形態は備へざるなし。東に近く比叡、如意、嶽より三の峯まで、東山三十六峯笑ふが如く、北には鞍馬、貴船、氷室、鷹峯、^(一)高雄の山々波濤の如く、西に稍隔りて愛宕小倉、龜山、嵐山、松尾より山崎に至りて地勢は窮る。松柏の綠色濃き中に、或は目覺むるやうなる櫻の入交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織込みたるあり。一面の草の頂なる四明嶽、春なほ雪白き比良の遠

^(一)國文學者、
市博士。金澤
四五三年。明
年四十一。治
一。歿。

幽婉

^(二)高尾、鷹雄と
も書く。

山などは、わけて朝日夕日に照映ゆる色の千變萬化なるぞ面白き。東の神樂岡、北の船岡、西の雙岡は、大和の畝傍、香具山、耳成の如く近く相並びてあらねど、子の日の遊に小松ひく樂しみなど、いづれ劣らぬ所がら、南に稍隔りて男山これに對し、國家鎮護の八幡宮、宮柱太知りまして、仰ぐも畏し。

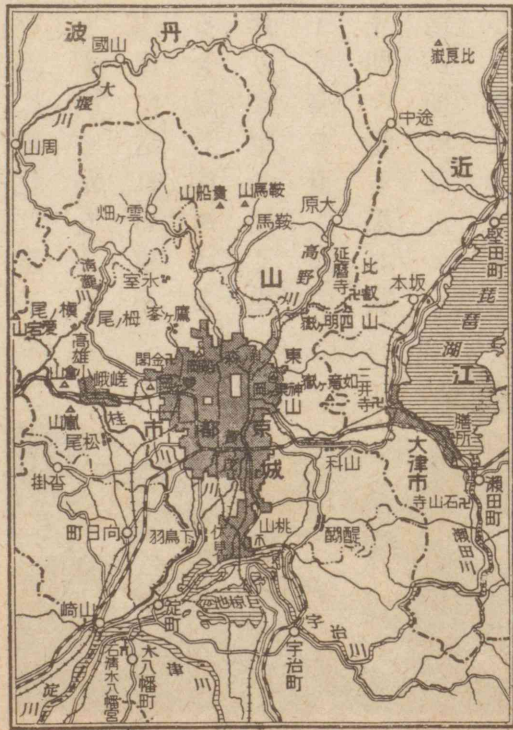
京の東端には賀茂川の流、^(一) 糺の河合に高野の支流を集めて、南に珠を碎き去り、西に桂川、^(二) 大堰の激湍に清瀧を併せて、琴の音涼しくまた南に向ふ。二川南に合し、更に淀の急流に流れ込みて、沈々として西の方難波をさして走る。

茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與ふるもの少しと雖も、一面より言へば、山の内に籠りて海を見ざるは、またそれだけの長所なくんばあらず。地勢の勾配稍急なれば、蘆間に出て入る白帆の町の側を往來する眺なき代りに、濁りて底の

(一)大堰川の下流をいふ。
(二)嵐山の下を過ぎて桂川は賀茂川に合する。
(三)淀川。
茫洋
浩蕩
跌宕
長所なくんばあらず

明らかならざる河水を知らず、京の水はわけてアルカリ性の鑛物を含めるにや、曝す布をも、人の膚をも眞白にす。海その物は清けれど、棄てたる塵埃を更に岸に打上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫などをる所は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬ事多し。京都に海なきは惜しむべしと雖も、海なくして清き京都は益、清きなり。

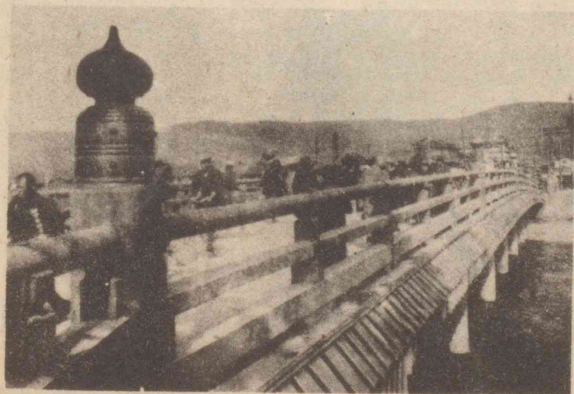
山紫水明の語はよく京都の景色を言表せり。いづこの山水も、白



挿圖の橋は昭和十年六月の洪水に流失した。

(一)京都市下京區。

中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむるところなるを知らば、三面を山にして土地濕潤に、水分を含む事殊に濃やかなるかは、説明を須ひずとも明らかなるべし。曾て一夏を北陸の海岸に送れる事ありき。一日驟雨の至れるを見る。疾風さと吹き、浪俄に高く、黒雲奔りて魔の如く、見るがうちに重なりく、て海を覆ふ。浪の音は雲の中にあり、電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散す。浪か、雷か、世界はたゞ一暗黒の中に没し去るかと思はれて、凄じかりき。かくの如き壯絶なる景は、我が數年滯留中、遂に京都にては見る事を得ざりしところなり。されど下



三條の橋大

(二)左京區。

あるかなきかの夢より未だ覺めやらず

(三)東山區。

京より吉田に通ひたる朝なく、の景色は、今もなほ彷彿として眼前にあるを覺ゆ。引渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の一つく、彼方へ彼方へと淡くなりて、向ふに寝たる東山は、あるかなきかの夢より未だ覺めやらず。吉田の岡に並び立てる松は、墨繪の刷毛の濃く淡く、花賣る少女の姿は隠れて、聲ぞ先づ朝靄を洩れ來る。時雨の景色のまたよその國には見られぬ様よ。愛宕の峯を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちに、はらくと面を撲つ。あはやと驚きも果てず、雲は走りて直ちに東山を包み、いつしかそれも晴れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝる優しき景色は山河襟帶の平安京の特色なり。

—國文學全史—

(一) 江戸時代の俳人。名は時、號は半掃庵と號した。名古屋の人。天明三年(二四三年)歿、年八十二。

(二) 莊子に「昔は莊周夢に蝴蝶と爲る云々」とある。

二百蟲譜

蝶の花に飛交ひたる、優しきものの限りなるべし。それも啼く音

横井也 有



莊周(橋本雅邦筆)

の愛なれば籠に苦しむ身ならぬこそ、なほめでたけれ。さてこそ莊周が夢も、このものには託しけめ。たゞとんばうのみこそ彼には、稍くらぶらめど、絲につながれ、もちにさゝれて、童のもてあそびとなるこそうたて

けれ。

子を持てる者はその恩愛にひかされてこそ苦勞はすれ。蜂の他の蟲を取りて我が子となす、老の行方をかゝらんとにもあらず、何

(一) 「花になく蛙の聲をきけば、生きたし生けるも何れか、歌を詠まざりける云々」
(二) 「古池やかはづとびこむ水の音」芭蕉
(三) 「やがて死ぬ、蝶の聲」芭蕉

を譲らんとてかくは骨折るや。我に似よ〜とは、いかにおのが身を思ひあがれるにかあらん。花に狂ずるとは詩人の稱にして、歌にはさしも詠まず。蜜をこぼして世の爲とするはよし。たゞ人目稀なる薬師堂に大きなる巢をつくりて、掃除坊主をおびやかさんとす。それも針なくば人には憎まれじを。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸ひなれ。朧月夜の風静まりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺したれば、このもの事、更にも誇り難し。

蟬は唯五月晴に聞初めたる程がよきなり。稍日盛に啼きさかる比は、人の汗絞る心地す。されば、初蝶とも、初蛙とも言ふ事を聞かず、このものばかり初蟬と言はるゝこそ、大きな手がらなれ。やがて死ぬ氣色は見えず」と、このものの上は、翁の一句に盡きたりと言ふべし。

〔晉の車胤。〕

螢はたぐふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛交ひ、草にすだく。五月の闇は唯このもの爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに貧の學者にとられて油火の代にせられたるは、このもの本意にはあらざるべし。歌に螢火と詠ませざるは、殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

ひぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕べは草に露おく頃ならん。

つくろいぼふしといふ蟬は、つくしこひしとも言ふなり。筑紫の人の旅に死して、このものになりたり。と世の諺に言へりけり。哀れは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蜘蛛は巧に網を結んで、ひそまつて物を害せんとす。歌に詠まれ、または退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありて、いと憎し。古代朝敵の初として、頼光〔一〕をさへおびやかしたる、いと恐し。さは

〔源頼光。武將。鎮守府將軍の仲の子。射を善くした。八一年。死。六治。〕

たて（蠶）

言へ、廢宅の荒れたる軒に、蟬の羽などかけ捨てたるは、いさゝか哀れ添ふ心地もせん。

蠶の生涯は世の爲に終り、火取蟲は誰が爲に身を焦すにか。

蜉蝣ははかなき例にひかれ、たて食ふ蟲は物好の謗となれり。

同じ寶の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、こがね蟲は卑し。

蟻は明暮にいそがしく、世の營にひまなき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めて止まず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安き事を得ん。さるもたより悪しき方に穴を營みて、千丈の堤を崩すべからず。

蝸牛は唯水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらん。家は持ちたれども行く先々を負ひ歩くは、水雲の安きにも似ず。

蝻螂の瘦せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の上にもこの類はあるべし。

(一)原は駿河國靜岡縣駿東郡吉原は同もと東海道五十三次の一。

(二)秋風に旋びぬらし藤袴つきりさせてふきり古今集在原棟梁(三)あまの川の藻にすむ蟲のわれからと音をこそ鳴かめ世をば怨み(古今集藤原直子)



竹の林の七賢(狩野元信筆)

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。唯原吉原を駕籠に乗りて富士を詠め行く人には似たり。

はたおり鈴蟲くつわ蟲はその音の似たるをもて名に呼べり。松蟲のその木にもよらでいかでかく名を附けたるならん。毛生ひむくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯し、人に疎まる。一つ在所に二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲の類なるべし。

きりくすのつりさせとは、人の爲に夜寒を教へ、藻にすむ蟲はわれからと、唯身の上を歎くらんを、蓑蟲のちよと呼ぶは、

(一)香の替康の交つた奇士阮籍山濤向秀劉伶阮咸王戎の七賢である。

(二)詩人。名は又平。明治七年(二五三四年)堺市に生れた。

いと優しげなり。されど、父のみこひて、などかは母を慕はざるらん。蚊は憎むべき限りながら、流石卯月の比端居珍しき夕べ、始めてほのかに聞きたらん、または長月の比力なく残りたるは、寂しき方もあり。蚊屋つりたる家の様、蚊遣焚く里の煙など、且は風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜話には、いかに團扇の暇なかりけん。

——鶉衣——

三 落葉を焚く歌

(二) 河井 醉茗

秋晴の朝庭守は

黄なる、かばなる、雌黄なる

木の葉草の葉うづだか、

火をうつさんとかゝまりぬ。

夜にうるほひし露霜も、

一葉一葉に乾きゆく

煙のかげに立ちそひて、

葉守の神やあらはれん。

葉守の神

三 落葉を焚く歌

二

眞夏大野を覆ひたる 國つ鎮めの公孫樹、
光に透いて金葉の みな地に落つるひゞきかな。

櫻の精はとほ春の 海を渡りて去ににけり。
朽ちてはかろき乾き葉の 梢はなるゝ力かな。

常緑なるべき檜葉杉葉、 うらがれたるがめら〜と、
火になりやすき秋のはて、 地の美は空にをさまらん。

機にかゝれる織ぎぬの 自然のあやのまばゆきも、
捲かるゝまゝに彼方なる はてしなき手に渡されぬ。

うらがる

あゝ落つる葉に驚きて、 烟をあぐる庭守よ、
萬葉焚いて盡きせざる 林に入らばをのゝかん。

— 醉茗詩集 —

四 若き友よ

永井潜

若き友よ、「世界は勇者に屬す」といふドイツの格言を知るか。アラ
イ・シエップフェルの言に、「人生に於て心及び體の勤勞なくしては、一事の
果を結ぶなし。努力し、尙努力する、これぞ實に人生なる」といふ名句
がある。またビュフォンは「天才とは忍耐の事なり」と言つてゐる。誠に
その通りである。人一たび勇氣の帆を揚げ、努力の權を揮ひ、堅忍の
舵を握る時、いかなる人生の狂瀾怒濤をも乗切つて、船を確實に成
功の彼岸に到達せしめる事が出来るのである。しかもこの勇氣も、
努力も、忍耐も、皆剛健鞏固な意思から生れ出るものである事を念

(一) 生理學者、醫學博士。東京帝國大學教授。北京醫學院教授。醫學博士。廣島縣に生れた。
(二) フランスの畫家。オランダに生れた。
(三) フランスの哲學家。西一八五八年に生れた。
(四) フランスの自然科學者。西一七七八年に生れた。
成功の彼岸

ふ時、意思は人格の中心であり、意思即ち人であると言ふ事が出来るのではないか。

若き友よ、剛健な意思は、いかなる境遇の下にも絶えず人をして前進せしめ、向上せしめるのみである。叩けよ、然らば啓かれん。強き意思は強き希望を喚起し、強き希望は強き豫想を招來し、強き豫想はよく「可能」を變じて「實在」となすのである。フランスの一青年士官が「余はフランスの元帥たらんと志す。大將軍たらんと志す」と言ひつゝ、その部屋を歩むを常としてゐたが、後年彼は遂に元帥となつた。曾て一指物師が、高官の椅子を特に心を用ひて修復してゐた。人が偶、そのわけを問うたところが、答へて言ふには「自分が他日この椅子に掛ける時に掛けよいやうにせんが爲である」と。不思議にも彼は遂にその椅子の主人公となつたといふ挿話が、スマイルズの

實在

(→)イギリスの傳記作家。(西紀一八〇四年)

「自助論」に載せられてある。

若き友よ、剛健な意思をもつ者は幸なるかな。彼にあつては失敗即ち成功である。彼には困難が最良の師となり、窮乏が最愛の友となるのである。試に香氣ある草を手にとつて見よ。これを揉む事愈、強うして、その香氣は益、高くなるではないか。リヒテル曰く、「人は貧苦の下にあつても、何等つぶやく必要はない。處女の耳に穴を穿つ痛みの後に、寶玉を懸け得る歡のある事を思へ」と。

將軍を試煉する者は、戦勝よりも戦敗である。漢の高祖は連戦連敗して、しかも支那を統一し、ワシントンもまた、戦に勝つよりも負ける事が多くて、しかも米國を救つたではないか。人生の戦に於て一度敗れ、二度敗れ、三度敗れたとて、斷じて失望落膽してはならない。敗慘がなければ勝利はなく、困厄がなければ成功はない。人生の

(→)ドイツの文學者。(西紀一七二五年)

(→)アメリカ合衆國の軍人。政治家。大統領。第一。西紀一七九三年

(一)イギリスの外
交家(西紀一
八二八年—
八八五年)
(二)孟子告子篇

行く手に横たはるいかなる障碍も、努力と堅忍とによつて征服され
れないものはないと確信せよ。さうして勇氣を鼓舞せよ。韃麻は大
膽にこれをつかむ時、絹絲のやうに軟かであるのである。艱難は神
の命令によつて我等の上に置かれた峻嚴な教師である。神は親の
如き保護者、教誡者で、我等が我等を知るよりも尙よく知り、我等が
我等を愛するよりも尙よく愛す」と言つたパークスの言を思へ。天
の大任をこの人に降さんとするや、必ず先づその心志を苦しむと
言つた孟子の教を玩味せよ。

若き友よ、各人自らが王者であり、自己の支配すべき王國をもつ
てゐるではないか。その王國は即ち自分自身であり、その支配者は
即ち自由な意思である。自由といふのは、斷じて放縱を意味するの
ではない。我等の意思は、水に浮べる浮草の、水の流のまに、昨日

(一)ギリシヤの哲
學者(西紀前
四七〇年—三
九九年)

は東、今日は西といふやうなものではなくて、剛健な水泳者が、自己
の力によつて勇往邁進し、波を切り流に遡つて、自ら欲する目的の
地點に向はんとする意味に於て確かに自由である。自由は責任を
伴ひ、支配は義務を負はしめる。我等は我等の剛健な意思を試煉
すべく、我が王國を支配しなければならぬ。ソクラテスの言つた
やうに、世界を動かさんと欲する者をして、先づ自己を動かさしめ
なければならぬ。

若き友よ、青年が人生を歩むや、その路の兩側には、幾多の妖魔が
相並んで立つてゐる。彼等は或は笑み、或は媚び、或は脅し、或は迫り、
あらゆる手段を以て卿を試問し、誘惑しようとしてゐる。一たびう
ち負ける時、それは永遠の墮落である事を思はなければならぬ。
傍目もふらず前進せよ。男らしく、唯男らしく「否」を叫び、「否」を實行せ

(一)ギリシヤの大詩人ホメロスの作オヂッマの主人公。トイ戦争のイタカカを勇將、イタカの途で、風を避ける。冒険譚は種々ある。

(二)支那武陵の桃源郷。陶淵明の桃花源記から出た。稱徳の次郎。模倣の仁。慈徳の仁。政名高。七十六年。政名高。七十六年。政名高。七十六年。

よ。一步躊躇すれば、一步破滅の淵に近附く事を思はなくてはならない。(一)オヂッセスが妖女の歌に耳を覆うて、一心不亂に漕いで漕いで、巨巖相撃つて船を微塵に砕くといふ恐しい海門を漕抜けたやうに、非常な勇氣と努力とを以てして、始めてこの恐しい魔手を振りほどく事が出来るのである。甘い言葉は、卿の血脈に黴菌を注射する針と思へ。唇に當てるに先立つて、勢よく杯を脚下に叩きつけよ。さうして序に、地獄の煙をつぎ込む煙管をも一擲せよ。かゝる時、卿は最も大なる敵よりもなほ打勝ち難い自己に克ち得たる言ひ知れぬ歡を感じずるであらう。

若き友よ、神は桃源郷に達するまでに、勤勞と困難との門扉を置いてゐる。(二)尊徳翁の言に「天は萬物を生ずれども、人は自ら勤勞してこれを取り、これを作らなければ、その用をなす事が出来ない。それ

(一)第八十二代後鳥羽天皇の御代。

(二)ベルギーの文學者。西紀一八六二年。



ルブ、フ、ーリンア

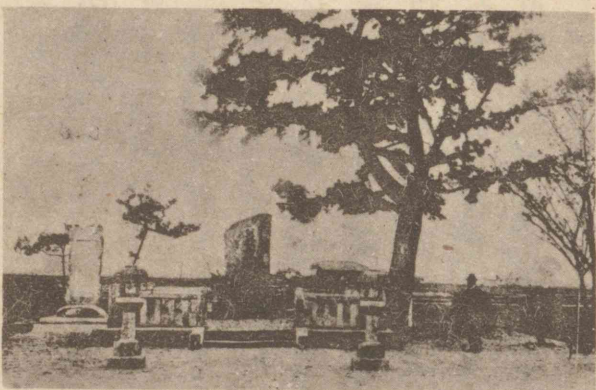
故に森林に方材なく、麻畑に織布がないのだ」といふ教訓がある。(三)汗なければ甘味なし」といふ英國の格言がある。努力せよ。努力せよ。努力せよ。人生何の生きがひがあらうぞ。時正に新涼郊墟に入り、神澄み體蘇らんとしてゐる。剛健な意思を喚起し、旺盛な元氣を振作するに、今よりよい時はないのである。願て果物屋の店頭を見れば、紫水晶のやうな甲州葡萄が輝いてゐる。夜深うしてこぼろぎ、草雲雀、鈴蟲などの音が雨のやうに多い。文治、建久の昔、雨宮勘解由が路傍に山葡萄を見附けてその栽培を始め、甲斐の徳本が更にこれを改良して、終に今日の盛を致したではないか。(四)メーテルリンクをして「今の文明世界がもつてゐる至高至純の名譽の一つ、最も賢明な博物學者の一人、

す。しめやかな春の雨につぼみは花に、芽は若葉に、地上の萬物悉く恵に蘇るのであります。しかもそれは、高い、雲の中から、黙黙として降注いで参ります。蓋し眞に偉い人は、黙々として偉い事をしてをるのであります。

今を去る二百餘年の昔、享保十七年に、いなごと、うんかとの爲にひどい饑饉が四國を襲ひました。その時、伊豫の國伊豫郡筒井村に百姓作兵衛といふ者があつて、一年の麥種子をもつて居りました。その父その子相次いで斃れ、死は將に彼をも見まはんとした。刹那にも、彼は頑として人の勸を斥けて、遂に麥種子の囊を枕にして餓死したのであります。作兵衛には、彼自身の命よりも、やがて國人の命の糊となるべき麥種子が大切であつたのであります。伊豫の國松前に建てられた義農之墓は、黙々として、しかも最も雄辯に、日月をも貫く凜乎たる義民作兵衛の心を、永遠に謳歌してをるのであります。

(一)第百十四代中御門天皇の御代(二三九二年)いなご(蝗子)うんか(浮塵子)

(二)愛媛縣伊豫郡松前町。謳歌する衆人が聲をそろへてその徳をたゞへる。



麥種子を擁護せんとした義民の心、これ即ち眞理を擁護せん

とする學者の精神であります。眞理こそは學者に取つての唯一の命であります。否、命よりも尊いものであります。彼は唯眞理の爲に眞理を求め、さうしてその得たる眞理によつて、未來永劫人を救ひ、世を助け、さうして自らは何の得るところもなく、唯黙々として甘んじてをるのであります。螺旋や滑車は機械の基礎を爲すもので、これが爲に生産がいかに増大したか、實に測り知るべからざるものがあります。しかもそれを發明した學者は、決して專賣特許によつて彼の懷を肥してはゐないのであります。否、その名前さへも夙に忘れられて

(一)イギリスの
者。西紀一七
四九年一八七
二三年

究極
最後の所。

功利主義
功名利欲をの
み専一とする
主張。

言ふべく餘り
に云々
明瞭すぎて言
ふ必要がない。

をるのであります。種痘の發明によつて、何物にも替難い可憐な
人の子の生命が永代^{ふた}だけ多く救はれる事でありませう。し
かもその發明者たる⁽¹⁾ジェンナーが、いかなる努力を以てそれを完
成し得たか、いかに多くの苦心を以て、怒罵と嘲笑とに耐へなけ
ればならなかつたか、それを知る人は甚だ稀であります。
抑、學術が眞理を求めて止まぬ人間の本性から生れ出たもの
である以上、學術の究極^{きうきく}の目的は、どこまでも眞理の探求でなけ
ればなりません。眞理の爲に眞理を愛し、學問の爲に學問をする
事が、學者の使命でなければならぬのであります。世には往々、
功利主義、實用第一の立場から、學術の價値を上下せんとする人
があります。それは大なる誤解であります。もとより學術の進
歩發達が人生を豊富ならしめ、自然を制御し、文化を増進し、國を
して富强ならしめ、人をして高尚ならしめる上に、いかに多大の
貢獻を爲したか、それは言ふべく餘りに明瞭な事實であります。

利用厚生
世の便利と生
活とを益する
こと。人民の
用を利し生を
厚くすること。

終始する
つきてゐる。
一貫してゐる。
(一)イタリー北
部の都會。此
の大學は十二
世紀に創立さ
れた。
(二)イタリーの生
理學者。ボロ
リナ大學で解
剖學を教授し
てゐた。西紀
一七三七年一
七九八年

しかし、それだからと言つて、學術をもつて單に利用厚生⁽¹⁾の具と
爲し、その研究は、全然實利實益を追うて行はれるものと斷ずる
のは、眞に學術を解し、學術を愛する人の言ふべき事ではないの
であります。學術によつて知り得た理法を應用して、人間生活の
上に幾多の幸福と利益と愉悅とが惠まれる事は、勿論望ましい
事であり、しかし、それは學術研究の自然の結果たるべき
ものであつて、決して究極の目的たるべきものでなく、またその
動機たるべきものでもないのであります。況や學術を種子とし
て私利私益を圖り、聲名榮達を望まんとするが如きは、眞の學者
たるべき者の最も恥とするところであり、學者の全生命は、
唯「眞理」⁽²⁾てふ二字に終始してをるのであります。この眞純な動機
によつて立ち、この眞純な目的を追うて進んでこそ、始めて曇な
き清淨な眞理の源泉に到達し得るのであります。
イタリーのボローナ大學の教授ガルバーニ⁽³⁾が、皮を剥いだ蛙

(一)イタリヤの物理學者。西紀一八七五年—
 (二)ポロランドの天文學者。西紀一八七三年—
 (三)ドイツの天文學者。西紀一八七三年—
 (四)ケプラーの天文學者。西紀一六一〇年—
 (五)ニュートンの重力説。西紀一六八七年—
 (六)ニュートンの重力説。西紀一六八七年—
 (七)ニュートンの重力説。西紀一六八七年—
 (八)ニュートンの重力説。西紀一六八七年—
 (九)ニュートンの重力説。西紀一六八七年—
 (一〇)ニュートンの重力説。西紀一六八七年—

をもつて空中電氣の實驗をなし、次いでボルタといふ物理學者がこれを追試し、遂に接觸電氣の發見となり、やがて電池が造られ、茲に電信、電話、電氣工業、電氣化學などの現代文明が、この人の世に持來されたのでありまして、人間の文化が地上に繁榮する限り、私たちは永遠にガルバーニやボルタに感謝しなければならぬのであります。またかのコペルニクス、ケプレル、ガリレオなどによつて舊い天動説が顛覆され、新しい地動説がうち建てられた事は、實に近代科學の上に動かすべからざる礎を据ゑたものであります。

さりながらその事が、直接富國強兵の上に、果してどれだけの寄與を致して居るでありませうか。また萬有引力説でふ大發見をなしたニュートン、及びニュートンを生んだ國民は、直接それによつて半錢の利益をも得てゐないではありませんか。一八八二年、コッホが結核菌を發見し、翌年ドイツ政府の命によつて印度に赴

(一)ドイツの醫學者。西紀一八七〇年—
 (二)ドイツの醫學者。西紀一八七〇年—
 (三)ドイツの醫學者。西紀一八七〇年—
 (四)ドイツの醫學者。西紀一八七〇年—
 (五)ドイツの醫學者。西紀一八七〇年—
 (六)ドイツの醫學者。西紀一八七〇年—
 (七)ドイツの醫學者。西紀一八七〇年—
 (八)ドイツの醫學者。西紀一八七〇年—
 (九)ドイツの醫學者。西紀一八七〇年—
 (一〇)ドイツの醫學者。西紀一八七〇年—

き、コレラの研究を行ひ、その病原菌を發見して、意氣揚々としてドイツに歸つて成績を發表した時、衛生學の泰斗ペッテンコーフェルだけは、獨り頑強にこれに反對しました。そして自分の學說の正しい事を證明すべく、自ら進んでコッホのコレラ菌純培養液を呑んだのであります。彼は幸に軽い下痢を起しただけで、コレラには罹らなかつたが、彼はこれを呑まんとする刹那、從容として、「たとひ私が間違つてゐて、この實驗が私の命を脅すやうな事があらうとも、私は自若として死に赴く事が出来る。何となれば、それは勝手な卑怯な自殺ではないからだ。健康と生命とは、世に尊い財寶であるに相違ないが、しかし、決して最も尊いものではない。禽獸の上に立つて萬物の靈長たるべき人間は、場合によつては喜んで生命をも犠牲に供する覺悟がなければならぬ」と。何といふ悲壯な覺悟でせう。何といふ尊い精神でせう。眞理に憧れて驀進しつゝある學者に取つては、一身一家の利害得喪の如き

は、全然眼中にないのであります。恰も闇黒の裡に輝く一點の光明を慕ひ來つて身を焦す蟲のやうに眞理を求めて止むに止まれぬ心の渴仰を満足すべく、學者はすべてを犠牲に供して悔いがないのであります。しかも黙々として横たはるこの尊い犠牲の屍の中から、人生を恵むべき長へに萎む事のない美しい花が咲出るのであります。

(科學畫報に據る)

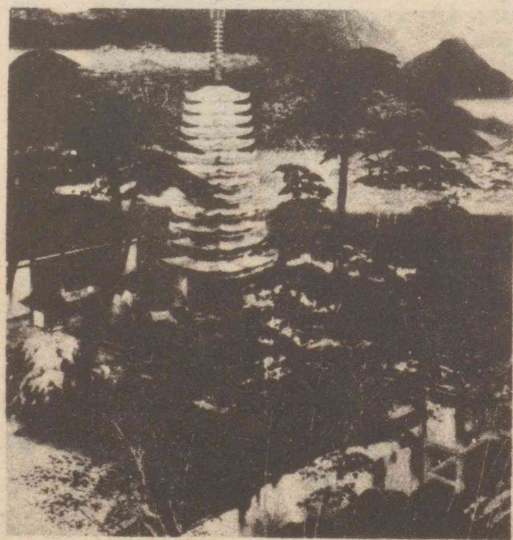
五 熊野落

大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞き召されん爲に、暫く南都の般若寺に忍んで御座ありけるが、笠置の城既に落ちぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐御身の上に迫りて、天地廣しと雖も御身を隠さるべき所なく、日月明らかなりと雖も長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隠れて、露に臥すうづらの床に御涙を争ひ、夜は孤

(一)護良親王。延暦寺の大塔をられたので大塔宮といふ。
(二)奈良市外にある。律宗。
(三)元弘元年(一九一八年)九月二十八日。

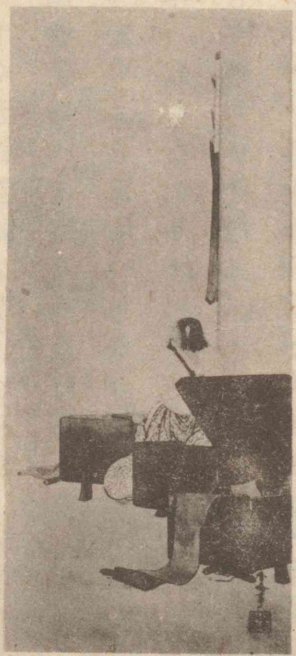
(一)奈良興福寺の寺北にあつた同一の寺の末寺の一。

村の辻に佇みて、人を尤むる里の犬に御心を惱まされ、いづことても御心安かるべき所なかりければ、かくても暫しはと思し召されけるところに、一乘院の候人按察法眼好專、いかにして聞きたりけん、五百餘騎を率して、未明に般若寺へぞ寄せたりける。をりふし宮につき奉りたる人一人もなかりければ、一防防ぎて落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、隙間もなく兵既に寺内に討入りだれば、紛れて御出であるべき方もなし。さらばよし自害せんと申し召して、既におしはだ脱がせ給ひたりけるが、事かなはざらん期に臨んで腹を



(筆光隆條東) 寺 若 般若

切らん事はいと易かるべし。若しやと隠れてみばやと思し召しかへして、佛殿の方を御覽するに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃かろうど三つあり、二つの櫃は未だ蓋をあけず、一つの櫃は御經を半ばすぎ取出して、蓋をもせざりけり。この蓋をあけたる櫃の中に、御身を縮めて伏させ給ひ、その上に御經を引きかづきて、隱形おんぎようの呪



犬塔宮脱危(谷口香崎筆)

を御心の中に唱へてぞおはしける。若し搜し出されば、やがて突立てんと思し召して、氷の如くなる刀をぬいて御腹にさし當て、兵「此所にこそ」と言はんずる一言を待たせ給ひける御心のうち、推量るもなほ淺かるべし。

これ體

夢に道行く心地

(一)支那唐代の高僧、印度に於て經文を大體に傳へたり、其の經文を漢譯したるを漢譯經文と云ふ。

さる程に兵佛殿に亂れ入つて、佛壇の下、天井の上までも残る所なく搜しけるが、餘りに索めかねて、「これ體のものこそ怪しけれ。あの大般若の櫃をあけて見よ」とて、蓋したる櫃二つを開いて御經を取出し、底を覗して見けれどもおはせず。蓋開きたる櫃は見るまでもなしとて、兵皆寺中を出去りぬ。宮は不思議の御命をつがせ給ひ、夢に道行く心地して、なほ櫃の中におはしけるが、若しまた兵の立歸り委しく搜す事もやあらんずらんと御思案あつて、やがて前に兵の搜し見たりつる櫃に入りかはらせ給ひてぞおはしける。

案の如く兵共また佛殿に立歸り、前に蓋の開きたるを見ざりつるがおぼつかなしとて、御經を皆うち移して見けるが、からりとうち笑うて、「大般若の櫃の中をよくよく搜したれば、大塔の宮はいらせ給はで、大唐の玄奘げんじやう三藏こそおはしけれ」と戯れければ、兵皆一同に笑うて、門外へぞ出でにける。これ偏に摩利支天の冥應、または

信心肝に銘す

(一)則村の第三子
延曆寺の律師
初め護良親王
氏に從ひ、後尊
たの叛に與し
た。

(二)義光。信濃の
人。元弘三年
(一九一三年)
吉野城の陥ら
うとした時、
大塔宮の身代
りになつた。

先達
龍樓鳳闕
華軒香車

十六善神の擁護による命なりと信心肝に銘じ、感涙御袖を濕せり。かくては南都邊の御隱所もかなひ難ければ、即ち般若寺を御出でありて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には光林坊玄尊、赤松律師則祐、木寺相模、岡本三河坊、武藏坊村上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎、彼此以上九人なり。宮をはじめ奉りて、御供の者までも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半ばにせめ、その中に年長ざるを先達につくり立て、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。

この君元より龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出てさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めてかなはせ給はじと、御供の人々かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮、脚巾、草鞋を召して、少しもくたびれたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤、怠

勤修

(一)和歌山縣日高郡にもあるが、此所は兵庫縣(淡路島)津名郡由良町和歌山對岸の港。

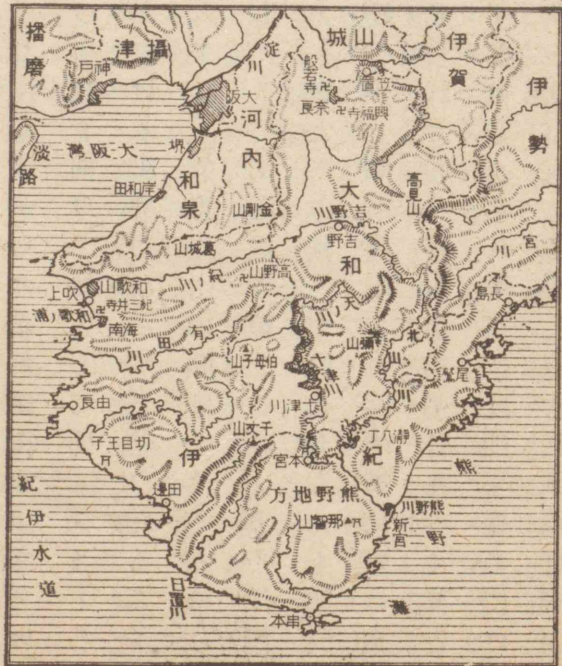
(二)和歌山縣海南市。
(三)和歌山市和歌ノ浦。
(四)共に同所附近。

雨を含める孤村の樹、夕べを送る遠寺の鐘、日高郡切目村。

らせ給はざりければ、路次に行逢ひける道者も、勤修を積める先達

も、見咎むる事なかりけり。

(一)由良の湊を見わたせば、
沖漕ぐ舟の楫緒絶え、浦の濱木綿幾重とも知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀の路の遠山渺々と、薄紫や藤代の松に懸れる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月に磨ける玉津島光も今はさらで、だに、長汀、曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨を含める孤村の樹、夕べを送る遠寺の鐘、哀れをもよほす時しもあれ、切目の王子に著き給ふ。



袖を片敷く

その夜は叢祠の露に御袖を片敷きて、夜もすがら祈り申させ給ひけり、丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと、神慮も暗に測ら

れたり。夜もすがらの禮拜に、御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫く御まどろ

みありける御夢に、びんづら結ひたる童子

一人來つて、熊野三山の間は、なほも人の心

不和にして、大義成り難し。これより十津川

の方へ御わたり候うて、時の到らんを御待

ち候へかし。兩所權現より案内者に附け參

らせられて候へば、御道指南仕るべく候」と

申すと御覽ぜられて、御夢は即ち覺めにけ

り。これ權現の御告なりけりと、たのもしく思し召されければ、未明

に御よろこびの奉幣をさげ、やがて十津川を尋ねてぞ分入らせ



〔三山は本宮、新宮、那智〕

給ひける。

その路の程三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は

高峯の雲に枕をそばだて、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴

を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なうして、空翠常

に衣を濕す。見あぐれば萬仞の青壁劍に削り、見おろせば千丈の碧

潭藍に染めり。數日の間かゝる峻難を経させ給へば、御身もくたび

れ果て、流る、汗水の如く、御足は缺損じて草鞋皆血に染れり。御

供の人々もその身鐵石にあらざれば、皆饑ゑ疲れて、はかしく

も歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手を挽いて、路の程十三日に、

十津川にぞ著かせ給ひける。

— 太平記 —

高峯の雲に枕をそばだつて、岩漏る水に渴を忍ぶ

天涯放浪の行脚僧

〔二卷。西行の家集。〕

嘖々

北面の士

厭離の志

六 詩人西行

藤岡作太郎

西行何者ぞ、天涯放浪の行脚僧。その名を一時の名流俊成と齊しうし、鎌倉室町の世、抑、歌道に於て定家を難ぜん輩は、冥加もあるべからず、罰を蒙るべき事なり。と言はれし時、稱讚の聲また定家に譲らず。近世に至つて定家の價值いたく墜落したれども、山家集の一書は、なほいかなる歌人の机邊をも去らず、西行の名今に嘖々たるは抑、何の故ぞ。

西行法師、俗名は佐藤義清、鎮守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代々武を以て家を立つ。義清また勇敢にして弓術を善くす。和歌に堪能なるは蓋しその天稟なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんとす。されど義清は榮利を喜ばずして、常に厭離の志あり。その出家の動機に就い

〔一〕京都市伏見區に宮址がある。

惕然

〔二〕清信士度人經の偈句。

愛著の絆

〔三〕第七十五代崇徳天皇の御代。(二八〇〇年)

〔四〕右兵衛佐頼朝。

〔五〕弘法大師。

ては、或は傳へて曰く、曾て同族左衛門尉憲康と同行して鳥羽殿より退出し、また明日を期して別る。次の朝參朝せんとて、約に隨ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騒ぎ、内には泣悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ねれば、殿は昨夜頓死し給へり。とて、若き妻、老いたる母の重なり伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念更に堅し。官を辭して許されざれども、恩を棄て無爲に入る。は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びて取りすがるを、思ひきりて縁より下に蹴落し、これこそ愛著の絆を斷つ始めぞと、願もせて家を遁れ出で、嵯峨に至りて剃髮せりと稱す。かくて名を西行また圓位といふ。出家する時、保延六年にして、西行歳正に二十三なりきといふ。西行既に世を遁れて高野に籠り、吉野に隠れ、出でては熊野に參り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて、右幕下に見參し、進みて奥州に至り、西の方は中國より四國に渡りて、大師の靈場を拜み、それより筑紫に

桑門

悠々自適

(一)鎌倉時代の豪僧。俗名を遠藤盛遠といふ。正治元年(一一九一年)寂。年八十。

遊べり。常に謂へらく「桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし」と。一枚の笠、一本の杖、草の枕、苔の茵、東西にさすらひ自然を友とし、悠々自適、興至れば則ち和歌を詠ず。高尾の文覺(一)これを惡み、弟子に告げて曰く、「遁世の身ならば一筋に佛道修行の外他事あるべからず。數寄を立て、此所彼所に嘯きありく條、憎き法師なり。いづこにても見あひたらば頭を打割るべし」と。その後、高尾の法華會に行脚の僧の參り會ひて、花の蔭など眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり、「誰ぞ」と問へば、「西行と申す者」と言ふ。文覺手ぐすねを引き、望のかなひつる體にて、明障子をあけて出づ。暫しまもりて、年比承り及びたるに、御尋ね悦び入り候。とて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子たちはいかなる事の出で來んかと、手に汗を握りたるに、この體たらくにて、西行は無事に歸り去りしかば、「日比の仰に違ひたるは」と怪しみ問ふ。文覺答へて、「あら、言ひがひなの法師どもや。あれは文覺に打たれ

手ぐすねを引く

言ひがひなの法師どもや

面様

涅槃

幽契違はず(一)一八五〇年。

(二)連歌師。飯尾氏。花の下と號した。紀伊の人。文龜二年(一一九二年)寂。年八十二。

私淑す

んずる者の面様か。文覺をこそ打たんずる者なれ」と言へりといふ。

西行深く月花を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせん事を思

ひて、詠じて曰く、

文

ねがはくは花のもと
にて春死なんその

きさらぎの望月のころ

覺

晚年洛東雙林寺の邊に草庵を結びて
閑居せるが、幽契違はず、建久元年二月十



六日、七十三歳にて入滅せり。

我が國古來詩人多しと雖も、深く自然に憧れ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行のうち終へし者、前後僅かに三人。西行(二)宗祇、芭蕉これなり。西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離のをりを、も厭はず、私淑してその跡を追ひし者、芭蕉は元祿泰平の機に乗じ

一期を劃す
風月に放浪し
雲水に吟嘯す
吟囊を肥す

て、また西行、宗祇が行狀を慕ひし者とす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人。各その道に一期を劃せし三家が、何れもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せし事を思へば、旅行がいかに詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。



宗祇法師 (野田九浦筆)

抑、平安時代の貴紳淑女は、賀茂、桂、二川の流域數里の間を己が世界とし、海も見ぬ天地に跼蹐し、足畿外に出でず。一生の經過極め

て、單調に感情を刺衝するものなければ、随つて思想の發展もある事なし。見聞するところは東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外を知らざれば、詠ずるところの歌も變化を見ず。子は父

跼蹐す

京洛

詞花言葉

簸却す

隱微の聲

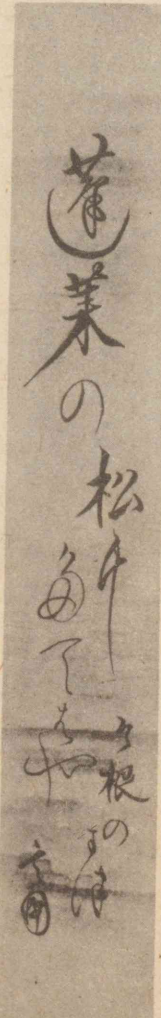
粉本

に繼ぎ、孫は祖を承け、唯同じ詞花言葉を飾るのみにて累代繼承し行けば、和歌の思想、辭句の上にもおのづから典型を生じて、天真を忘れ、實情を欺き、虚偽に流れ、浮華輕薄徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊その内容は空しく、滔々として風をなせる時、西行獨り蹶起して従來踏襲せる典型を簸却し、自ら山水の間に逍遙して、直接に自然が隱微の聲を聞き、感得するところは萬朶の花と咲けり。平安の末、崇徳天皇の御製が殊に斷腸の響あるは、その悲惨なる實境を詠ぜる事の、世上一般の題詠と選を殊にすればなり。わけて西行が歌ふところ、一も古人の粉本を模倣せず、一字一句皆己が肺腑より出づ。數百年の後、なほ名聲噴々として、天成の大才と許さるゝも、また宜ならずや。

蓬萊の松に
たてはや會
根の松
其角

(一)俳人。加賀國
金澤の人。京
都で醫を業と
してゐた。芭
蕉の門人。生
歿年不詳。

七 枯野
金屏の松の古びや冬ごもり
からびたる三井の二王や冬木立
蒲團著て寝たるすがたや東山



芭蕉
其角
嵐雪

蕭條として石に日の入る枯野かな
ほたくと朝日さしこむ炬燵かな
ながくと川一筋や雪の原
大根引大根で道ををしへけり
冬枯や雀のありく戸樋の中

燕村
丈草
凡兆
一茶
太祇

其角筆蹟

八十六夜日記

阿佛尼

(一)鎌倉時代の女
流文學者。歌
人。藤原爲家
の妻。弘安六
年(一七二六)
母、九十四年
寂、年七十六。
(二)今京都市左
區。東國街道
から京都にあ
る。入口にあ
る。今滋賀縣
栗太郡老上村。

(一) 粟田口といふ所より車はかへしつ。程なく逢坂の關越ゆる程に、
さだめなき命は知らぬ旅なれど
またあふ坂とたのめてぞゆく

(二) 野路といふ所は、こしかたゆくさき人も見えぬ。日は暮れかゝり
て、いともの悲しと思ふに、時雨さへうちそゞぐ。
うちしぐれふる里おもふ袖ぬれて

ゆくさきとほき野路のしの原

(三) こよひは鏡といふ所に著くべしと定めつれど、暮果てゝ行著か
ず、守山といふ所にとゞまりぬ。此所にも時雨なほ慕ひ來にけり。
いとゞなほ袖ぬらせとや宿りけん
まなく時雨のもる山にしも

(四) 同縣蒲生郡鏡
山村の北にあ
つた古驛。
(五) 同縣野洲郡守
山町。野洲川
の西岸にある。

(一) 建治三年(一
九三七年)十
月
(二) 野洲郡

(三) 同縣阪田郡

けぢめ

(四) 阪田郡。米原
の東北五キロ
メイトル。居
宿の清水は古
來名高い。

(五) 岐阜縣不破郡
一みの國せ
き藤川たえ
ずして君に代
へんよるづに
まへて二古御
集大に歌所今

今日は十六日の夜なりけり。いと苦しくて臥しぬ。未だ月の光は
かすかに残りたる曙に、守山を出でて行く。やす川渡る程先立ちて
行く旅人の、駒の足の音ばかりさやかにて、霧いと深し。

旅人はみなもろともに朝立ちて

こまうちわたす野洲の川霧

十七日の夜は、小野のしゆくといふ所にとまる。月出でて、山の
峯に立ちつゝきたる松の木の間、けぢめ見えていと面白し。此所は
夜深き霧のまよひにたどり出でてつゝさめがるといふ水、夏ならばう
ち過ぎましやと思ふに、かちびとはなほ立寄りて汲むめり。

むすぶ手に濁る心をすゝぎなば

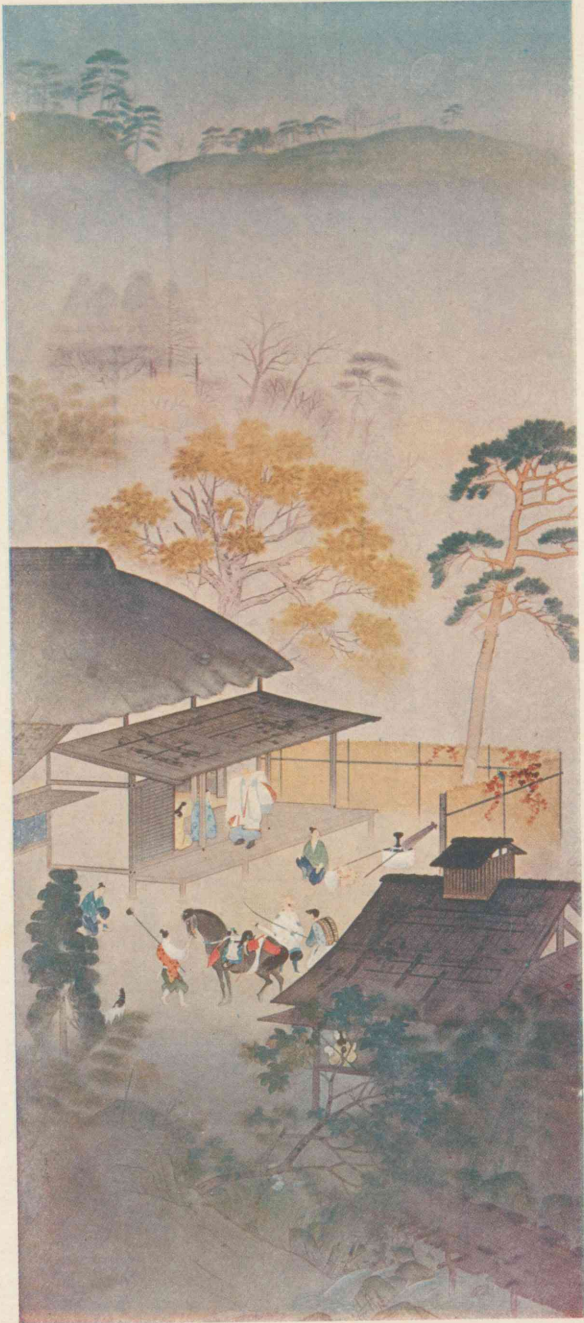
うき世の夢やさめが井の水

とぞ覺ゆる。

十八日、美濃國關の藤川渡る程に、先づ思ひつゞけける、

十六夜日記

岩田正己筆



〔一〕不破郡關尾の松尾の關天武天皇の御時、關の板庇は今も變らざりけり。
 〔二〕關の板庇は今も變らざりけり。
 〔三〕關の板庇は今も變らざりけり。
 〔四〕關の板庇は今も變らざりけり。

わが子ども君に仕へん爲ならで

わたらましやは關のふぢ川

不破〔一〕の關屋の板庇は今も變らざりけり。

ひま多き不破の關屋はこの程の

しぐれも月もいかにもるらん

關よりかき暮しつる雨、時雨に過ぎてふり暮せば、路もいと悪し

くて、心より外〔二〕に笠縫〔三〕のうまやといふ所に、暮果てねどとままる。

たび人はみのうち拂ふゆふ暮の

雨にやどかるかさぬひの里

二十一日〔四〕八橋を出でて行くに、いとよく晴れたり。山遠きはら野

を分けゆく。晝つ方になりて紅葉いと多き山に向ひて行く。風につ

れなき所々、朽葉に染めかへてけり。常磐木どもも立ちまじりて、あ

をぢの錦を見る心地す。人に問へば宮路山といふ。

しぐれけり染むるちしほのはてはまた
もみぢの錦いろかへるまで

この山まではむかし見し心地するに、頃さへ變らねば、
待ちけりなむかしもこえしみやぢ山

おなじ時雨のめぐりあふ世を

山の裾野に竹のある所に、茅屋のひとつ見ゆる、いかにして、何の
たよりにかくて住むらんと見ゆ。

ぬしやたれ山の裾野に宿しめて

あたり寂しき竹のひとつむら

日は入果て、なほ物のあやめもわかぬ程に、わたうどとかやい
ふ所にとゞまりぬ。

九 生活の基礎

木村泰賢

(一) 度津、寶飯郡。

(二) 印度哲學者、
文學博士、
和手縣の人、
昭五十年歿。

月並的な堅實主義

余は原則として、生活には必ず苦痛が伴なふものであると考へてゐる。随つて、いかにして愉快に生活し得べきかといふ事などに就いては、まだ考へた事がない。しかしながら、いかにすれば眞面目で確實な生活を爲し得べきかといふ事に就いては、自分でも始終考へてゐるし、また時には人にも語つた事がある。そこで、今は主としてこの確實生活の根柢に就いて述べてみようと思ふ。確實生活と言つても、別に新しいものではない。要するに、昔から言ひふるされて來た月並的な堅實主義に外ならぬけれども、少くとも余に取つては、この堅實主義は何程か體驗的保證があるので、在來の說法以上に、實際的權威をもつてゐるものと信じてゐる。

然らば、その堅實主義とはいかなるものか。概括的に言へば、堅實な人格的修養といふ事になるが、自分はこれを三段に分けて考へてゐる。その第一綱領は能力の修養である。即ち自己の職務なり學

欺瞞

藝なりに關して、その技能を鍊磨する事である。いつの世でもさうであるが、特に今後の時代は全く實力の世で、一藝一能に達せぬ者は、生きがひのある生活をする事が殆ど不可能である。世にはさしたる能力もなく、外見上は可なり能力があるやうに装つてゐる人もあるが、それは欺瞞であつて、斷じて確實な生活に契合したやうり方ではない。次第に競争が激しくなるにつれ、自然に淘汰され、凋落せねばならぬものである。眞に確實な安心な生活をして行く爲には、自己の腕に對する確信が必要である。随つてこれが爲には、何事をするにしても、絶えず自己の腕を磨いて、いつどこに出ても、一本立で行く事の出来る實力を養つて置かねばならぬ。よく求職者の中には、自己の腕を磨く事はせず、徒に何等かの情實的同情をたどつて、良い地位を得ようなどと焦る者もあるが、それは非常な心得違である。いかに情實の世とは言へ、相當な實力のない者に對

情實的同情

推挽

一生を清算する

しては、下から押上げる譯にも行かなければ、上から引上げる譯にも行かないではないか。これに反して、實力さへ確實なら、その人の性格に特別な缺點のない限り、遅かれ早かれ、いつかは必ず芽をふく時節が到來せずにはゐない。勿論、世に立つて行くには、先輩や、同輩や、後輩の推挽によらねばならぬ。しかし、その根本となるものは、飽くまでも自己の實力である。

但し、確實生活の基礎を單に能力一點にあるとのみ考へたら、それは大なる誤謬である。世には可なり實力を具へ、しかも外見上可なりの成功をしてゐるやうな人でも、自らその一生を清算してみれば、却つて失敗の生活をしてゐる人が少くない。それは何の爲か。これには種々の原因もあらうが、その大部分は、道德的缺陷の伴なふ爲である。蓋し、道德的缺陷は、外見的成功の大きければ大きい程、その生活に對する暗黒面を構成する事も大きく、絶えずその生活

を苦しめるからである。

其所で確實生活の第二綱領は、道德的修養を積む事であらねばならぬ。即ち自己の性格を陶冶して、道德的缺陷に陥らないやうにするのである。但し、道德的修養とは言へ、模範的道德家たれといふ意味ではない。勿論、それは望ましい事ではあるけれども、常人に強ひてこれを求めようとすれば、却つて動もすれば消極的な、しかも偽善を養ふ弊に陥るからである。余の此所に言ふ道德的修養とは、要するに健全な常識的、道德的判斷を以てして、少くとも平均線以上に出るやうにせねばならぬといふ事である。これを消極的に言へば、公的生活は勿論の事、私的生活を公開しても、よしや模範的にはならなくとも、少くとも後めたいところのない程の生活を期する事である。出來得べくんば、自己を天下の照魔鏡に照しても、常に光風霽月の心境に居りたいといふ事である。

光風霽月の心境

道德的二重生活

これに反して、道德的二重生活をする事は最も避けねばならぬ。世の中に何が苦しいと言つて、この二重生活をする程苦しい事はあるまい。内と外と、言と行との相反する生活を一身に兼ねて行かねばならぬといふ事が、どれだけ我等の眞を害し、その勇を挫き、果は常に不安の生活を持來すものであるかは、人々の少くとも多少経験したところであらう。特にその内面生活が一旦暴露されると、その人の地位なり名聲なりが根柢から動搖するといつたやうな祕密を有する人の生活は、たとひ外的にはいか程華麗であつても、内的にはいかに不確實であるかは、改めて言ふまでもない。世には綱渡りのやうな生活をしながら、それでゐる外見上成功してゐる人もあるので、道德的修養を以て人生の進路に關係しないかのやうに思ふ人もないではないが、かやうなのは、眞に生活の奥義を究めない者と言はねばならぬ。

内面生活

必然的

最後に、確實生活の第三綱領は、宗教的信念に安住する事である。由來我等の生活には、種々の不安や苦痛が必然的に伴ふものである。腕があり、徳行に不斷の注意を怠らぬ人でも、必ずしも常に幸福な生活を送り得るとは限つてゐない。時には意外の不幸に遭つて、悲歎失望の淵に沈まねばならぬ事もある。特に今後生活上の壓迫が益々激甚になり、生存競争の熾烈になるにつれて、劣者は勿論の事、優者と雖も、尙その背後には幾多の苦痛悲哀が附纏つて來るものと覺悟せねばならぬ。かゝる場合に於ける最後の慰安光明は、どうしても宗教的信念を措いて他に求める途がないのである。宗教的信念のある者は、いかに生活に疲れても、常に其所に深切な慰安を感じ、一道の光明を認める事が出来る。さうしてこれは、やがて我等の生活に對する偉大な支持となるもので、眞の確實生活は、此所に到つて始めて不動の地位に到達するのである。宗教を信ずる事

絮説する
歸納する

(一) 經濟學者、政治家、經濟學士、明治四十九年(一八六六年)靜岡縣に生れた。
(二) 福澤諭吉のこゝと。諭吉は教育家、思想家、慶應義塾の創立者。家は豊前中津藩士。明治三十四年(一八六一年)歿。年六十八。
(三) 東京市芝區。

を老人の退屈しのぎでもあるかのやうに考へるなどは、信念と生活との根本關係に對して、まだ眞に知るところがないのに起因するのである。

いかに絮説しても、いかに論議しても、確實生活の根本と言へば、これ等の三綱領に歸納し得るのである。活動の源泉も、調和の契機點も、發展の基礎も、此所に置かれるのであつて、生活の要諦は、歸するところ、この三綱領の外にはないと思ふ。少くとも余はこの確信の下に自分の生活を規定して、専ら努力してゐるのである。

— 解脱への道 —



町人諭吉

太田正孝

私は、彼自ら口にしたといふ^(一)「町人諭吉」といふ言葉を、大膽にも標題として掲げてゐる。かりそめにも^(二)三田の聖人とも言はれる

市井
まちなか。
野人
一般の人民。
庶民。

町奴
徳川時代に町
人で任侠を重
んじた人。男
だて。俠客。
人爵
人のさだめた
爵位の官。天
爵の對。
(一)加賀金澤の藩
主前田侯。百
萬石の太守と
して頗る勢威
があつた。

人を妄りに「町人」と呼んだのではない。それは彼の最も喜ぶ全人格を表現したものであるからである。彼はどこまでも市井の野人として、いみじくも生を楽しんでゐたからである。

「町人」といふ語は「素町人」といふ語があるやうに、とかく卑しい言葉である如くに響く。それは徳川時代末期の町人たちの無智と墮落とから來てゐるのであるが、このいはゆる町人の中にも、心の清い男もあつた。男を賣らうとする「町奴」がそれである。自由で、囚はれず、邪氣がなく、廣い心持の宿つてゐる人たちである。彼等には、人爵などをそつちのけにした、原始のまゝの大自然のうちに生れつゝいた心境があつて、殿様も武士もこはくはなかつた。加賀様の前に呼出された俳人一茶は「鶯や御前へ出ても同じ聲」とあつさりやつてのけてゐる。それが、ほんたうの野人の心境である。正しい町人の心根である。諭吉はその心を以て推進まなければ新日本を建設する事は出來ないと信じてゐた。「町人」とは

おれのやうな人間である。おれのやうな人間にして、始めて「町人」と名のり得る。彼は身を以てそれを示さうとしたのである。

「町人」とは、人間らしい人間といふ事である。社會人の事である。官位、爵祿で飾り立てられたものではない。金錢的名譽で彩られ

たものでもない。



福澤諭吉

維新當時の書生は元氣なものであつた。脛は丸出し、毛むくじやらの腕を張る。大道を大膽に歩く。天下無敵が看板。無作法が豪傑の

身だしなみと心得る。そして彼等は偉人に撞れてゐる。三田の慶應義塾といふ名が耳にはいる。諭吉を慕つて田舎を飛出して來る。あつばれ書生の面目を諭吉に褒められようと、小倉袴に肩怒らして、義塾に參向する。しかし、勝手がまるで違つてゐるのに驚く。塾生は袴など穿いてゐない。縞の著物に角帯。ぞろりと著流し

參向する
まわりむかふ。
まゐる。
ぞろり
著物を裾長に
著てゐるさま。
著流し
袴を穿かない
平常のいでたち。

てゐる。髭を伸ばさぬ。髪も刈つてゐる。誠にさつぱりしてゐる。豪傑書生は自分を顧る。小倉袴に兵兒帶へいごび、それもしわくちやぞある。髪は伸びてゐる。爪には垢が溜つてゐる。

冷飯草履
緒なども棄て
編み、紙をも
巻かないその
まゝの草履
方丈
一丈四方。狭
い意味に用ひ
あつげにとら
れる
ひどくあきれ
て我をうしな

塾にはいる。いかにもよく掃除されてゐる。器物もちやんと整へて置かれてある。綺麗で氣持がいゝ。さうするには毎日掃除しなければならぬ。塾生は總掛りて掃除をする。更に一週間に一度は大掃除をする。塾生は机、夜具、ランプ、炭取など、ありつたけの財産を外へ運び出す。室の中をがらんとさせる。はたく。掃く。雑巾をかける。それを諭吉が見廻る。著流して、尻を端折つて、冷飯草履ひんぱんそうりを履いてゐる。これを見た漢學塾育ちの豪傑書生はめんくらふ。大丈夫當に天下國家を掃除すべし。何ぞ方丈の小室をや。と思つてゐたから、皆あつげに取られる。しかも、今の世に名を出してゐる彼のお弟子の政治家や實業家が、皆この業を積んだのである。諭吉は常に塾生に身だしなみを説く。自らも禮儀作法を重ん

自由人
東縛されない
境遇にある人

序を知る
上下や長幼な
どの順

分別
かんがへ。わ
きまへ。

心術
心のよる所。
ころだて。

元祿武士
諭吉は當時の
氣風のあるの

を戒めて、身
だしなみを重

代の武士を模
範にせよと言

つたのであら
う。

(一)關西屈指の富
豪。當主は男
爵。門池善右衛

格はうろく焙
素焼の土鍋。用
物をいるにひる

ずる。言語動作を慎む。そして、人の心は同じでないから、自分の思ふ事を丸出しに言つて少しも遠慮しなかつたら、すぐに喧嘩になる。人となつきあふには、物言ものいひに氣を付け、失禮なふるまひなどあつてはならぬ。と塾生に教へる。町人は自由人である。自由人には身だしなみが大切である。自由人は禮を知り、序じを知り、そしてまた分別がなければならぬ。
更に諭吉は語を強めて言ふ。苟も立身出世の志ある者は、その心術を元祿武士とし、その働を小役人、素町人にしなければならぬ。と、これこそ、今の世の人にも繰返して讀んでもらひたい文句である。

今は昔の事である。大阪の鴻池家（一）このいけの門前を、毎日のやうに、はうろくや、はうろくと呼んで歩く男があつた。番頭さんは、このはうろく屋がいかにも勤勉で、且熱心なのに感心して、或日呼止めて、「はうろく屋さん、お前さんもいつまでさういふ商賣をやつてゐ

根性
こゝろね。こ
ころだて。

てもし方があるまい。わしが御主人に話してあげるから、どうだ、この家に御奉公する氣はないか」と言つた。はうろく屋は番頭さんの深切な言葉を喜んだ。が、「誠に有難う存じます。何れ私も落ちぶれましたら、他人様の御厄介になりませう」と、あつさりと言つてしまつた。「何れ私も落ちぶれましたら」と言つたところに、このはうろく屋の根性が出てゐる。ほんたうの町人としての意氣が見えて嬉しい。

諭吉は言ふ、苟も我が身にかなふ仕事であつたら、進取一方と決斷して、左右を顧ない事である。しかも、その中に唯一つ大切な事は、いかなる職業を執るにしても、獨立の大義を忘れる事なく、君子の風を存して、大切な場合に臨んで節を屈しない事である」と。獨立自尊の大義は、この精神から生れて來る。いはゆる町人のほんたうの意味は、この言葉の裡にはつきりと現れてゐる。

諭吉のモットーとする獨立自尊といふ言葉は、彼の一生を貫い

(一)標語。

てゐる魂の聲である。この意味に於て「獨立自尊即ち町人精神」といふ事になる。諭吉は學生に獨立自尊の義を説いて、「獨立自尊の一義は、讀書中にこれを解し、先輩の言を聞いてこれを覺りまた塾中の空氣を呼吸して自然に心に得る者もあるであらう。これは、學生として勉強してゐる間にも、日夜實行すべき事であつて必ずしも後日になつて始めて實行すべきものではない。獨立自尊とは、他人の厄介にならず、また他人に依頼する事なくして一身を處し、我が思ふまゝにこの世を渡るといふ意味である」と。してみると、本心に背かなかつたはうろく屋は、獨立自尊の實行者であつた。彼にして若し鴻池家の番頭になつたなら、生活の安きを得たであらうが、それは即ち人間としては落ちぶれた事になる。本心に背かないところに、町人としての面目がある。もとより町人にも器の大小がある。方の大小もある。諭吉はその偉大な町人の典型であつたのである。

——町人諭吉——

一〇 長柄堤の訣別

坪内逍遙

〔一〕英文學者、劇作家、文學博士。名は雄藏。岐阜縣の人。昭和十年、七十七年歿。
 〔二〕長柄川は今の大阪市東淀川區を流れる新淀川の附近にあつた。
 〔三〕豊臣氏の功臣。元和元年（一六二七）年、大阪城の後に自死した。年六十。
 〔四〕今大阪府（攝津國）三島郡茨木町。
 〔五〕石川伊豆守貞政。

晨雞再び鳴いて残月薄く、征馬連りにいなゝいて行人出づ。はや分れ行く横雲や、残んの星を一つづ、鐘が消し行くいなめの長柄堤に秋たけて、一叢蘆に風黒く、有明凄き大川水、逝きて歸らぬ浪の音、狭霧に咽び白け行く、千草が蔭の蟲の聲、哀れはいとまざるらん。片桐市、正且元は、居城茨木へ立退かんと、従ふ郎等一百餘人、寅の刻に邸を立つて、大阪城を後になし、列を正して徐々と、長柄堤にさし掛る。その時市、正手綱を控へ、從兵を先へ進ませ、弟主膳正を呼び近づけ、改めて言ひけるやう、市いかに弟、我昨日討手を待受け、自殺せんず覺悟なりしに、伊豆守が殘兵ぬけがけなし、討手の荒膽をひしぎし爲、備ありと見たがへしか、また寄せ來らん模様もなく、あまつさへ夜に入りては、外にありし家臣まで、變を聞きつけ馳集り、血氣のともがらこれに氣を得て、薪に油をそゞげる如く、弓、鐵砲とひしめき騒ぎ、命をきかばこ

〔一〕織田信雄常眞。
 〔二〕豊臣秀頼。

〔三〕木村長門守重成。

吉左右

差配



そ。うちすておかば、珍事に及ばんも圖り難く、暫く彼等をなだめん爲、ひと先づ茨木へ引退き、後事を圖らんとは言ひしもの、昨夜ほのかに傳へ聞けば、織田入道も君を片見限り、俄に京表へ退きし由、お家の危機愈、迫んぬ。今にも關東と隙を生じ、大事に到らん事必定なり。それにつき所存あつて、先刻今村三右衛門を木村が邸へ走らせたり。おつつけ三右が吉左右あらん。我はこれにて相待つべし。御身は暫く我に代り、手勢を差配し、途中に不慮の間違なきやう、一足先へ參らるべし。

と言葉のうち、遙かにしたひ駈來る足音。

主あの足音は確かに今村。 重三右衛門か。 今我が君これに御座

ありしか。長門様にはおつつけこれへ。市ほ、大儀々々。満足なるぞよ。然らば主膳は一足先へ。三右衛門も此所かまはず。我はこれにて相待つべし。主仰では御座りますれど、油断ならざる當節がら、いかなる變事あらんも知れず、全唯御一人この所に御座あらんは心許なし。主、せめて我々、二人、兩人は。市はて入らぬ遠慮。氣づかひ致すな。往け。主、ぢやと申して。市はて往けと申すに。二人は、あ。

顔見合せて是非なくも、主膳を先に三右衛門、心残して行過ぐる。後には何か一思案、寂然として駒たつる、長柄堤の有明方、ねぐらにさへづる小鳥の聲、川霧やうく晴行けば、遠樹模糊として幹を分ち、ほの見えわたる賤が屋に、一筋昇る朝煙、だかけの聲、勇ましく、生氣溢るゝ、ひんがしの空には似ぬや入る方の、月凄じき柳蔭、枯葉枝まばらにして風飄々、見る目も昏し遠方に、おぼろくとあらはるゝ、名におぼ阪の四衛八街、悄然として寂しげに、一棟高く聳えしは、

くだかけ

南山不落

(一)豊臣秀吉

(二)加藤肥後守清

せめく(三)

(四)秀吉の正室、北政所とも言

唇齒亡ぶ

(四)徳川秀忠の長女、慶長八年(一六三三年)秀頼に嫁いだ。
 (三)京都方廣寺の大佛殿の鐘の銘に「國家安康」の文字があつたので、家康は自分であつたもの、あるふも、ちかかけた。

市お、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと、築かせられし大阪城、故殿下かくれさせ給ひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ。取分け加藤肥州逝去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者は才略乏しく、阿附黨同して相せめげば、大政所の御方さへ、當家を餘所に見そなはし、浮世離れし御有様。唇齒既に亡ぶ。今にもあれ事起らば、金城湯池もそのかひなく、

言ひかけて聲曇らせ、

市須彌より重き御遺命、夢聊かも忘れざれど、御運の末か情なや。この且元がする事なす事、いすかの嘴とくひ違ひ、兩家を繋ぐ絆にもと、迎へ奉りし千姫君は、東西不和の道火となり、毘廬舍那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか、お家とこしなへに康かれと、祝ひし文字が原となり、降つて沸いたる難題は、唯前門の虎にして、後に不慮

姑息因循
わな良

の豺狼あり。かゝる仕儀となつたる事、御運の末と言ひながら、
こらへず馬より飛びくだり、彼方に向ひ平伏なし、
市、これ、しかしながら不肖且元、愚昧にして先見なく、姑息因循して
大事を誤り、空しく關東のわなに罹り、仰せ附けられし御遺命に、背
き奉る今日の仕合、不忠とも言ひがひなしとも思し召さん。それを
思へば某が、この腸はちぎるゝばかり、つぐのひ難き不臣の罪は、あ
の世でおわび仕らん。お宥しなされて下さりませ。

在すが如く兩手を突き、人目なければ稍しばし、不覺の涙に暮れけるが、
稍あつて心づき、

市、あゝ、我ながら不覺の至。我が大罪の御わびよりも、さしかゝる
お家の安危。長門守にはいかにせし、心許なき事どもぢやなあ。

すかし眺むるをりこそあれ、遙かに聞ゆる蹄の音程もあらせず唯一騎、
殘霧つんざき一散に、汗馬に宙を走り來る木村長門守重成。

本市、正殿に候な。市、長門殿待ちかねしぞ。

言ふ間に駈寄るくつわづら、右手にあり立ち顔見合せ、言葉はなくてす
ずるにも、先づ袖ぬるゝ朝露や、風塵々たる枯柳の枝、入方の月ゆらめき
て、老行く秋の寂しさを、長柄堤に留むらん。

本、もはや豊臣の御社稷も、愈末となつたるか、棟梁と頼む足下そこもとま
で、佞人、讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。
某圖らぬ事よりして、端なくも御母公(一)の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮の
その間(二)に、思ひがけぬ珍變あり、續いて足下に御討手と、昨朝承り大
いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道
殿日頃に似氣なく、激論の末席を蹴立て、只今退座ありしとばかり、
後は亂脈無法の評定、御母公の威を笠に被る、大野渡邊等が我意暴
慢。この上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かき切らん
と二たびまで、刀の柄に手は掛けしが、貴殿の日頃の教訓を、思ひ出
して無念を忍び、無實と知つて忠臣を、救ひ得ざりし言ひがひなさ。

(一) 秀頼の母淀君。

(二) 名は治長。
(三) 名は糺。

鼠輩

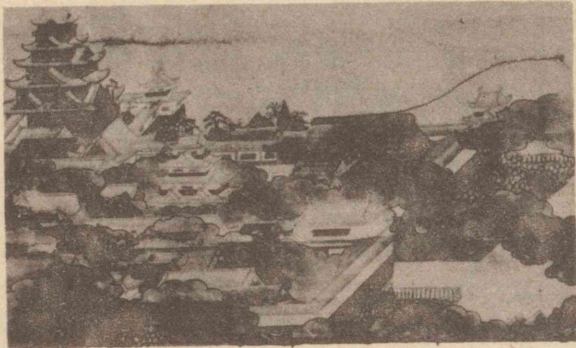
(一)和歌山縣伊都郡高野山の北谷にある町。
(二)名は昌幸。
(三)大阪落城の際戦死した。年四十六。

悔むを且元おし宥め、

市いしくも堪忍せられしぞや。かねても屢申せし如く、お家の大仇は彼等にあらざ。鼠輩の爲に命を落すは、大忠臣の所爲にあらじ。某とてもこの度の一條、遺恨骨に徹すと雖も、今更繰返すは愚痴の至。大切なるはお家の後事。某退去の事、關東に聞えなば、破綻生ぜん事治定なるに、昨日までは去就を定めざりし織田殿の、既に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた、大亂破裂せんは目前なり。この上は唯偏に、籠城の計畫こそ肝要なれ。木して籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。市「されば今御城に兵糧金銀は乏しからず。まつた猛卒、勇士も事缺かねど、得難きは智謀の將なり。某これを慮り、萬一の備をなし置きたり。木してその智謀の將とは、市今九度山に隠れ忍ぶ、信州上田前の城主、眞田安房守が二男、左衛門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ、

上使

出丸



智勇兼備の良軍師、關ヶ原の一戦以來、關東の跋扈を怒り、螫して世の

様を窺ひをるを、先年お身方となし置いたり。事起らば上使を以て、急ぎ彼を招かるべし。合戦の進退は、一切かの人に任せられよ。その他關ヶ原の一亂以後、浪々なせし長曾我部盛親、まつた黒田家の浪人後藤又兵衛基次、何れも得易からぬ良將なるが、かねてち顧なみは附けおきたり。上御使を以て招かせ城られなば、心を傾け馳參ぜん。これ第一の手配なり。木してまた籠城となつたる曉敵を防がん手配は、市その儀もかねて地利を考へ、出丸なくてはかなふまじと、前年紀州の山々より、材木數多伐出させ、商業の爲と偽り、紀州川の川上より、浪速津に押流させ、御

船入に積みおいたり。まつた港口の御庫には、年頃力めて購ひおきたる、數萬俵の糧米あり。籠城數年にわたると言ふとも、なほ支ふるに餘りあるべし。木、それに加へて故殿下が貯へおかれし數萬の金銀、近年御出費嵩むと雖も、なほ若干の餘財あり。木、甲冑、兵具も乏しからず。木、城は名に負ふ南山不落。木、眞田、後藤の智勇をもて、この堅城に立籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護すると きんば、木、たとひ關東の奸老雄、利をくらはせ諸大名をなづけ、六十餘州の兵を盡し、四方八面より攻寄すとも、木、なか／＼三年四年が程には、攻落さん事難かるべし。木、まつた若年には候へども、愈、軍始りなば、我また一方を承り、速水、御宿、和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の吹飜さん白旗は、祖先佐佐木が四つ目結、君臣將士心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石もまた透りぬべし。利欲に集る關東勢、なに退くるに難かるべきや。この

(一)徳川家康

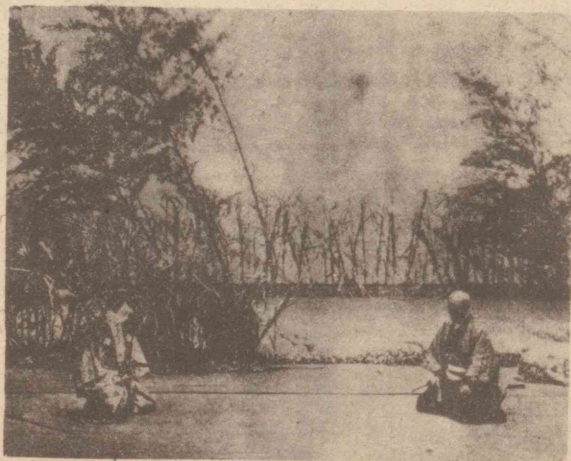
(二)名は守久

(三)名は正倫

(四)名は宗長

(一)家康

上は仰に従ひ、この事君に言上なし、直ちに軍の手配せん。御心安かれ市、正殿。木、ほ、たのもし、唯
 大切なるは上下の一致、必ず忠勤勵
 まれよ。とは言ひながら往時に照し、
 成行く末を鑑れば、木、淀の御方の
 御氣質、社鼠に等しき大野、渡邊、木、上、
 御發明にわたらせらるれど、木、讒
 佞これを蔽ふが故、木、地の利はあ
 れども人の和なく、木、故太閤が御
 威武に、戦き震ひうち伏し、六十餘
 州の民草も、木、天の時にや、大御所
 の、おのづからなる徳風に、いつしか靡く世の有様。木、いかなれば
 かくまでに、御運傾く西天の、木、有明の影薄れつゝ、木、東天紅と



(面臺舞) 別 訣 の 堤 柄 長

大慈大悲

八面に、かしましく鳴くくだかけは、
世の成行の、二人影なるか、
市新日東天に昇るといふ、

是非もなき世の有様と、入る方の月詠め入り、しばしは愚痴にをちかた
寺、耳驚かす鐘の聲夜はほのくくと明けにけり。
——桐一葉——

一一 光頼卿の参内

さる程に内裏には、同じき十九日公卿僉議とて催されけり勸修
寺左衛門督光頼卿、この程は信頼卿の舉動過分なりとて、不参にて
おはしましけるが、参内して承らんとて、殊に鮮かに束帶引きつく
ろひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩き給ひ、傅子の桂右馬允範
能に、膚に腹巻著せ、雑色の装束にいでた、せ、自然の事もあらば人
手に懸くな。汝が手に懸けて光頼が首をば急ぎ取れ」とて、御身近く
置き、そのほか清げなる雑色四五人召具して、大軍陣を張りて、所々

(一)平治元年(一八一九年)二月十九日、藤原頼朝の正二位権大納言に進み、桂大納言と言つた。承安三年(一一九三年)八月、藤原信頼の亂に敗れて、清盛に斬られた。自然の事、た、年二十七。

門々を固く守護しけるを事ともせず、先高らかに追はせて入り給へば、兵共も大いに恐れ奉り、弓をひらめ、矢をそばめて通し奉る。

紫宸殿の後を経て、殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、その



束の帯の圖

座の上藤たち皆下にぞ著か
れたる。光頼卿こは不思議の
事かな。人はいかにふるまふ
とも、彼は右衛門督我は左衛
門督なれば、下には著くまじ
きものをと思はれければ、左
大辨宰相長方卿、末座の宰相

(一)藤原頼朝の子、從二位權中納言となつた。末座の宰相しどけなし

にておはしましけるに、今日の御座席こそ世にしどけなう見え候へ」と色代して、しづくくと歩み、信頼卿の上にむずと著き給ふ。光頼卿は信頼卿の爲には母方の舅なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐

氣色す

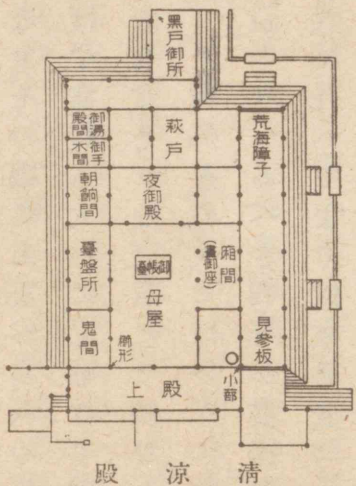
れて見えられけり。右の袖の上にお懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、著座の公卿あなさましと見給ふに、光頼卿下襲したぎの裾引直し、衣紋つくろひ、笏取直し、氣色して、「今日は衛府督が一座する」と見えて候。召に參ぜざらん者をば、死罪に行はるべしとやらん承りて參内するところなり。抑、何事の御諛ぞ」と問ひけれども、信頼卿物も宣はず、著座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議のさたもなし。程經て光頼卿つい立ちて、「惡しう參つて候ひけり」とて、しづくと歩み出でられけり。

出仕す

庭上に充ち満ちたる兵共これを見奉りて、「あはれ、この殿は大剛の人かな。さんぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に著く人一人もおはしまさざりつるに、し出したる事よ門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず、あはれ、この人を大將として合戦せば、いかばかりかたのもしからん」と申せば、

壁に耳天に口

(一)藤原惟方。檢非遣使別當。



傍なる者の「昔頼光、頼信とて源氏の名將おはしましき。その頼光をうち返して光頼と名のり給へば、これも剛にましますぞかし」と言へば、また傍より「なぞ、その頼信をうち返して信頼と付き給ふ右衛門督殿は、あれ程臆病にはおはしますぞ」と言へば、「壁に耳天に口といふ事あり。怖し。聞かじ」と言ひながら、皆忍笑に笑ひけり。

光頼卿かやうにふるまひ給へども、急ぎても出でられず。殿上の小じとみの前、見參の板高らかに踏鳴して立たれたりけるが、荒海障子の北、萩の戸の邊に、弟の別當惟方のおはしけるを招き寄せ、宣ひけるは、「公卿僉議とて催されつる間、參じたれども、承り定めたる事もなし。誠やらん、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る

有職

(一)藤原通憲入道
信西

(二)今都市左京
區吉田山

先蹤

天氣

曩祖

(三)勸修寺内大臣
高藤

(四)三條右大臣定
方高藤の子

さしもどかる

如きは、その人皆當時の有職然るべき人共なり。その中に入らん事甚だ面目なるべし。さても先日右衛門督が車の尻に乗つて、少納言入道が首實檢の爲に、神樂岡へ向はれける事はいかに。以ての外然るべからざる舉動かな。近衛大將、檢非違使、別當は他に異なる重職なり。その職にゐながら、人の車の尻に乗り給ふ事、先蹤も未だ聞及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中首實檢は甚だ穩便ならずと宣へば、別當、それは天氣にて候ひしかばとて、赤面せられけり。

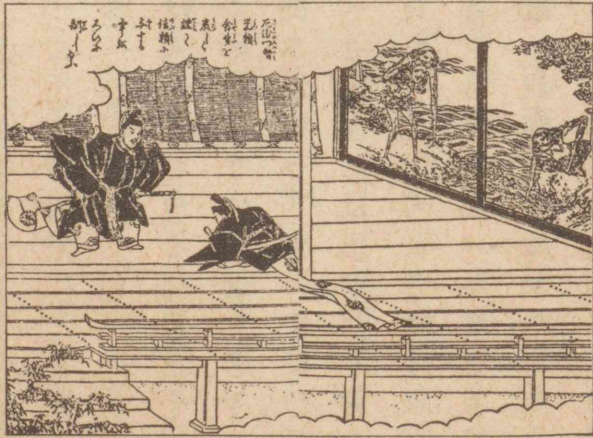
光頼卿重ねて、こはいかに敕諭なればとて、いかで存ずる旨を一議申さざるべき。我等が曩祖勸修寺内大臣、三條右大臣が延喜の聖代に仕へてより以來、君既に十九代、臣また十一代、承り行ふ事は皆これ徳政なり、一度も惡事に從はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、偏に有道の臣に伴なつて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもどかるゝ程の事はなかりしに、御邊始

相構へて

灰燼の地とな

時刻をや廻ら

めて暴惡の臣に語らはれて、累家の佳名を失はん事、口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳上るなるが、和泉、紀伊國、伊賀、伊勢の家人等待受けて、大勢にてあなり。信頼卿が語らふところの兵若干ならじ。平家の大勢押寄せて攻めんには、時刻をや廻らすべき。若しまた火などを懸けなば、君もいかでか安穩にわたらせ給ふべき。灰燼の地となりたらんだにも朝家の御歎なるべし。いかに況や君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡この時にあるべきをや。右衛門督は御邊に大小事を申し合すところ聞ゆれ、相構



(繪挿物語物治平本版古) む戒を方惟卿頼光

(一)第七十八代二條天皇。
(二)後白河上皇。

へて相構へて隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべし。さて主上はいづこにおはしますぞ。黒戸の御所に、上皇は、一本御書所に、内侍所は、温明殿に、劍璽はいづこに、夜の御殿に、と、左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。

また朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ、と宣へば、それには右衛門督住み候へば、その方さまの女房などぞかげろひ候らんと申されければ、光頼卿聞きもあへず、世の中は今かくござんなれ。主上のわたらせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸の御所に遷し參らせたり。末代なれども、流石に日月は未だ地に落ち給はぬものを、天照大神、正八幡宮は王法をいかに守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありと雖も、我が朝には未だかくの如き先蹤を聞かず、前代未聞の不思議かな。とて、のろくしげに憚るところなく口説き給へば、惟方は人もや聞くらんと、よにすさま

かげろふ

かくござんな

のろくしげ

宿業

じげにて立たれたれども、且は悲しくて、我いかなる宿業によつて、かゝる世に生れあひ、憂き事をのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を見聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。とて、袍の袖絞るばかり泣かれけり。信頼の座上に著かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみて、うち萎れてぞ出て給ひける。

—平治物語—

一二 漁夫

和辻哲郎

人生は戦である。そして戦の大小深淺が人間の價値を左右する。私は或冬の日、紺青鮮かな海の邊に立つた。帆を張つた二三十艘の小舟が、群をなして沖から歸つて来る。そして鳩が地へ舞ひおりるやうに、徐々に一艘づつ帆をおろして、半町程の沖合に屯した。岸との間には大きな白い磯波が卷返してゐる。いつの間にか老人や、

(一)哲學者、文學博士。東京帝國大學教授。明治二十二年(一九一九年)兵庫縣に生れた。

女や子供たちが、岸邊に群がり立つた。やがて體格の立派な若者等の乗つた舟が、岸へ突進んで來る。磯波は烈しく押戻す。磯から綱が投げられる。若者が波の間に飛込んで行く。舟は木の葉のやうにもまれてゐる。綱が舟に結び附けられる。若者は舷に肩を當てる。陸からは綱を引く者が、諸聲に力の韻律を響かせる。かくて波を蹴散し、足をそろへ聲を合せて、舟を砂の上に引きずり上げて行く。

一艘上ると共に、舟にゐた若者たちは、直ちに綱を取つて海へ向つた。次の一艘が磯波に乗掛ると、丁度荒廻る鹿の角に投掛けるやうに、若者は舟に綱を投掛ける。そして他の若者たちは躍り掛つて、舷に肩を當て、一氣に舟を引上げる。かうして次から次へと、數十艘の舟が陸に上げられるのである。陸上の人數は益々殖える。舟は益々面白さうに上つて來る。老人や、女や、子供たちは、綱につかまつて快活に跳ねてゐる。誰が命令するといふのでもないのに、一團の人々

有機體

集中と純一

は有機體のやうに、協力と分業とで、完全に仕事を成遂げて行く。

私は息を詰めてこの光景を見守つた。海の力と戦ふ人間の姿。集中と純一とが最も具體的な形に現れてゐる力の充實。隙間のない活動。一人の少年が兩手を高く擧げて、波の中に躍り込んで行く。首だけ出して、波にさらはれた板切に追ひすがる。やがて板切を抱いて、水を跳飛しながら駈上つて來る。生命が躍り跳ねてゐる。生命が自然と戦ひ、それを征服してゐる。

私は其所に現れた集中と純一と、全存在的な活動とを見て、暫し恍惚とした。この氣持のよさは、我々がすべての活動に追求してゐるところの一種の法悦であつた。私たちの内にもまた生命の焰はかく燃上らなくてはいけない。誠にそれは生命本來の姿であり、また生命本來の歡喜である。

かうして漁夫の群の活動を眺めてゐるうちに、私はふと傍觀者

法悦

立場を是認する

(一)ロシヤの文豪
思想家(西紀
一八二八年)
(二)フランソワ
ダンの彫
刻家
ロダンの彫
刻家



「考へる男」の姿とが相並んで考へる男の姿とが相並んで浮び出た。私は石の上に腰をおろして、右の腕を左の膝に突いて、顎を手の甲に載せて、そして考へて沈んだ。残つた舟はもう二三艘になつてゐた。

私は思つた、漁夫の群に貴い集中と純一とを認めたのは、私の心に過ぎなかつたのではあるまいか。彼等はやがて濱から家に歸る。其所にはもう貴さは無い。彼等は波と戦つて勇ましくうち克つた。

しかし敵手が人間になり、更に自分の心になると、彼等はもう立派な戦士ではない。彼等の活動は眞生の面影を暗示する。しかし、それは彼等自身の全生活ではなかつた。彼等は低い力と戦つてゐる時にのみ強いのであつた。

私は複雑な、深さの知れぬ人生の色々な力を思つた。そして集中と純一との缺けてゐるみじめな醜さを心に浮べた。其所にある苦しい戦は、裸になつて冬の海に飛込む事では解決されさうにもなかつた。私は唯自分の力で、自分の内生にある集中と純一とを獲得する外はない。その爲には、私はあらゆる方面に終局まで戦はなくしてはならぬ。勝利を得るまでの分裂した生活のみじめさは、目下自分の力では如何ともし難い。

私は一つの事を悟り得た。迷と屈託とに遅滞してゐるの故を以て、直ちにその人の人格を卑しめてはいけない。單に態度の純一な

終局

屈託

形を免れない。しかしながら將來棟梁の材となるものは、若木の時に平凡に眞直に生長したものでなくてはならぬ。これを名づけて「偉大なる平凡」と言ふのである。

西洋の諺に「二錢に利口で十圓にばか」といふのがある。即ち目の先の事には利口であるが、大局の事にはばかであると言ふのである。日本で「文惜しみの百失ひ」といふのに似てゐる。餘り近視眼的に物事を觀察しては却つて失敗する。人生には風波が多い。その目先の波一つばかりを見ては失敗する。少くとも波を二つ以上見て置かねばならぬ。二つの波に跨がる船は顛覆しない。二つの波を見るだけの心得のある人は決して失敗せぬ。この考へ方を「二波主義」と言ふ。

嘗て佛王ヘンリー四世が英王ゼームス一世を罵つて「ゼームス一世は基督教國に於ける最も利口なるばかり」と言つた。ゼームス一世の批評としての當否は別問題として、最も利口なる

近視眼的に云
遠見のきかぬ
觀察をして
西紀一五八
九年即位一
九八年ナ
の救令の粉
ての教界を
を鎮めたの
一六五〇年
一六五三西
紀一六五三
一六五五年
王權の始
唱へて王權
伸張を計り
外望を失ひ
イギリスを
の因をなし
西紀一六五
五年

皮肉
骨身にこたへ
る程銳利な非
難をすること

せつば詰る
窮してし方が
なくなる

得々然
得意なさま

かりそめに覺
えたり

何といふ事な
しに覺えた

糊口を凌ぐ
からうじて生
計を立てる

孫子の書
た兵法の書

情勢
ありさま

ばか」といふ文字は、痛快な皮肉である。即ち小局より見れば利口であつて何でも出来る。しかし、大局から見れば大ばか者であつて、家を喪ひ身を滅すといふ實例は、世上到る所に發見されるのである。世間では往々、平素僅かばかりの注意をすれば、何の困難も生じないものを、ことさらにうち棄て置いて、さて愈せつば詰つた間際になつて、刃の上を渡るやうな藝當を演じて、漸くこれを切抜け、却つて得々然としてその才を誇るといふ者がある。凡そ天下にこれ程ばかな者はない。川柳にも「藝は身を助ける程の不仕合」とあるが、かりそめに覺えた藝で、糊口を凌ぐといふ境遇となれば、これ程不仕合な事はないのである。

孫子に「善く戦ふ者は勝易きに勝つ。故に善く戦ふ者の勝つや、智名なく勇功なし」といふ文句がある。これは兵法ばかりではない、人間の處世法に於ても最も大切な訓言である。その意味は、戦争の上手と言はれる人は、豫め周囲の情勢を作つて、極めて容易

に勝利を得るやうにこしらへて置く。それであるから、さあ戦争が始つたとすると、平々凡々にすらくと勝つてしまふ。それ故に、餘りに呆氣なく勝負がついてしまつて、偉い功名談が出来ない。奇妙な計略もなければ勇敢な武名もないと言ふのである。これを處世法に應用すれば、平素に用心をして用意して勉強してゐれば、何の奇もない間に自然に成功するのである。

私が幼少の時に源平盛衰記を讀んで、源九郎判官義經が大のひいきであつた。義經と言へば、牛若丸と言つた子供の時から、鞍馬山に登つて天狗相手に劍術の稽古をしたり、五條の橋で辨慶を負したり、一の谷の逆落しとか、屋島の八艘飛とかいつたやうに、目の廻る程活躍した英雄である。それで子供心にも、義經程偉い人間はないと思つてゐた。然るに私は年を取るに隨つて、一つの疑問を懐くやうになつた。それは、これ程偉い義經が、兄の頼朝と不和となつた時に、まるで鼠が猫に出遭つたやうに、戦争にも

ひいき最良

(一)今の石川縣(加賀國)郡安宅町附美に治元年(一〇五一年)源朝が通れるの北設けた。爲に説
勸進帳 僧徒などが俗財を寄進して淨土を爲すに記してその主意を集めて帳簿に用ひる
(二)今の神奈川縣(相模國)足柄下郡片浦村石橋の西(一〇八四年)八月、頼朝は三百騎を率ゐてこの大庭山に陣して、三つと戦つた。大庭山に陣して、三つと戦つた。

何にもならず、唯逃げまはり、安宅(一)の關では辨慶が勸進帳(二)を讀んだので、漸く關所を出て、奥州へ逃延びたといふ憐れな芝居が残つてゐる。平家に對してあれ程に強い大將が、何故に頼朝に對してはこんな弱いのであるか。これがどう考へても理解出来ぬ。兄の頼朝と言へば、少しも強いといふ話がない。頭が大きかつたと言ふだけで、戦争には全く弱い。石橋山の戦争では散々にうち負けて、朽木の穴に隠れたといふ程の弱蟲である。この弱蟲に對して、戦争の神様のやうな義經が、一戦にも及ばずして逃げまはるといふのは、到底判断が出来ない事であると思つた。

しかし、段々と考へて行くうちに、自然々々に、義經よりは頼朝の方が偉いといふ事がわかつて來た。頼朝の偉いのは、義經の偉いのは全く様子が違つてゐる。頼朝が平家に捕はれて、既に打首になるところを、池禪尼(三)の情によつて生きてゐた時に、或者は頼朝に勸めて、頭髮を剃つて僧になれと言つた。頼朝は唯沈黙し

驕慢 おごりたかぶ
あさはか
思慮のたか
ぬこと。考の
浅いこと。
段違 數等のへだ
りがあつて及
びもつかない
こと。

て聽いてゐた。或者はまた頼朝に説いて、決して僧になるなど言
つた。頼朝はこれに對しても、唯黙つて聽いてゐた。頼朝はかくの
如く奥底の知れない深みのある人物である。然るに義経は、天狗
相手に劍術を稽古するとか、五條の橋で辨慶を負すとかいつた
やうな、薄つぺらな子供だましの人物である。即ち頼朝は、將に將
たるの徳を備へてゐるけれども、義経は單に兵に將たるに過ぎ
ない。そして義経は平家を滅した功に誇つて、驕慢の態度を取つ
た。これ等は全く修養の足らない、あさはかな行動である。兄の頼
朝とは全く段違の小人物である。換言すれば、頼朝は一錢にばか
で十圓に利口である。小局にばかて大局に利口である。然るに義
経は、一錢に利口で十圓にばかである。小局に利口で大局にばか
である。即ち頼朝は偉大なる愚者であつて、義経は貧弱なる賢者
である。義経が頼朝に對して手も足も出ないのは、誠に當然の事
であつて、少しも不思議はないのである。

小利口な人間はだめだ。ばかでも大きい人間がよい。即ち小局
から見てばかでもよい。大局から見て利口でなくてはならぬ。故
に私は今の青年に望む、青年よ偉大なれ。貧弱なる賢者とならん
よりは、偉大なる愚者となれ。これが私の亡父の教であつて、私の
今日までの守本尊である。

——梅白し——

一三 小野の御室

昔(一)惟喬親王と申す皇子おはしましけり。山崎(二)のあなたに水無瀬
といふ所に宮ありけり。年毎の櫻の花盛には、その宮へなんおはし
ましける。その時、右の馬の頭なりける人を、常(三)にゐておはしましけ
り。狩は懇にもせて、大和歌にかゝれりけり。今狩する交野(四)の渚の院
の櫻殊に面白し。その木の下におりゐて、枝を折りてかざしにさし
て、皆歌詠みけり。馬の頭なりける人の詠める、

(一)第五十五代文
徳天皇の第一
皇子。小野宮
と申す。
(二)京都府乙訓郡
の南隅、大山
崎村の地名。
(三)在原業平。
(四)今の大阪府
河内國北河
内郡殿山町に
あつた。

よの中にたえて櫻のなかりせば
春のこゝろはのどけからまし

また人の歌

散ればこそいとゞ

櫻はめでたけれ

うき世になにか

久しかるべき

歸りて宮に入らせ給ひぬ。夜更
くるまで物語して、さてあるじの
皇子入りて、大殿ごもり給ひなん
とす。十一日の月も隠れなんとす
れば、かの馬の頭の詠める、

あかなくにまだきも月のかくるゝか

大殿ごもる



小野の雪 (筆夫忠村吉)

さてもさぶら
ひてしがな

山の端にげて入れずもあらなん
かくしつゝ詣で仕うまつりけるを、皇子思の外に御髪おろさせ
給ひて、小野といふ所に住み給ひけり。正月ヒツキに拜み奉らんとて詣で
たるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室みむろに詣で拜み奉
るに、つれづれといとも悲しくておはしましければ、稍久しくさ
ぶらひて、いにしへの事など思ひ出でて聞えさせけり。さてもさぶ
らひてしがなと思へど、公事どもありければえさぶらはて、夕暮に
歸るとて、

忘れては夢かと思ふ思ひきや

ゆきふみわけて君を見んとは

と詠みて、泣くゝ歸りにけり。

— 伊勢物語 —

(一)鎌倉時代の歌人、文學者、都の人。建保四年(一一八二)六月に歿したと云はれる。

うたかた
棟を並べいら
かを争ふ

一四 方丈記 その一

鴨 長明

ゆく川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、且消え、且結びて、久しくとゞまる事なし。世の中にあらる人と住家と、またかくの如し。玉敷の都のうち、棟を並べいらかを争へる、たかきいやしき人のすまひは、代々を経てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて、今年を作り、あるは大家亡びて、小家となる。住む人もこれに同じ。所も變らず、人も多かれど、古へ見し人は、二三十人がうちに僅かに一人二人なり。あしたに死しゆふべに生るゝならひ、唯水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、いづ方より來りて、いづ方へか去る。また知らず、假のやどり、誰が爲に心を惱まし、何によりて

無常を争ひ去る

(一)第八十代高倉天皇の御代。
(二)八三七年



安元の大火 (伊藤藤龍筆)

か目を喜ばしむる。そのあるじと住家と無常を争ひ去る様、言はゞ朝顔の露に異ならず。あるは露落ちて花残り、残ると雖も朝日に枯れぬ。あるは花は凋みて露なほ消えず。消えずと雖もゆふべを待つ事なし。凡そ物の心を知れりしより、この方、四十餘りの春秋を送れる間に、世の不思議を見ること、稍たびくになりぬ。

安元の大火

去にし、安元三年四月二十八日かとよ、風烈しく吹きて、静かならざりし夜、戌の時ばかり都の異より火出でて來て、乾に至る。果てには朱雀門、大極殿、大學寮、民部の省まで移りて、一夜が程に塵灰となり、にき。火元は樋口富の小路とかや、病人

を宿せる假屋より出で來けるとなん。吹迷ふ風にとかく移り行く程に、扇を廣げたるが如く末廣になりぬ。遠き家は煙に咽び、近きあたりはひたすら焰を地に吹きつけたり。空には灰を吹立てたれば、火の光に映じてあまねく紅なる中に、風に堪へず吹切られたる焰飛ぶが如くにして、一二町を越えつゝ移り行く。その中の人、現心あらんや。あるは煙に咽びて倒れ伏し、あるは焰にまぐれて忽ちに死にぬ。あるはまた纒かに身一つからくして遁れたれども、資財を取らぬ。あるは及ばず、七珍萬寶さながら灰燼となりなき。そのつひえい出づるに及ばず、このたび公卿の家十六焼けたり。ましてその外は數を知らず。すべて都のうち三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人、馬牛のたぐひ邊際を知らず。人の營皆おろかなるうちに、さしも危き京中の家を作るとて、寶を費し心を悩ます事は、すぐれてあぢきなくぞ侍るべき。

治承の辻風

(一)第八十一代安徳天皇の御代、二八四〇年

また治承^(一)四年卯月二十九日の頃、中の御門、京極の程より大きな辻風起りて、六條わたりまで、いかめしく吹きける事侍りき。三四町をかけて吹きまくる間に、そのうちに籠れる家ども、大きなも、小さなも、一つとして破れざるはなし。さながらひらに倒れたるもあり。けた、柱ばかり残れるもあり。また門の上を吹放ちて、四五町が程に置き、また垣を吹拂ひて、隣と一つになせり。況や家の内の寶數を盡して空にあがり、檜皮、ふき板のたぐひ、冬の木の葉の風に亂るるが如し。塵を煙の如く吹立てたれば、すべて目も見えず。夥しく鳴りとよむ音に、物言ふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりとも、かくこそはとぞ覺えける。

けた桁

地獄の業風

一五 方丈記 その二

都うつり

また同じ年の六月の頃、俄に都うつり侍りき。いと思の外なりし事なり。おほかたこの京の初を聞けば、嵯峨天皇の御時都と奠まりにけるより後、既に數百歳を経たり。ことなる故なくて、たやすく改るべくもあらねば、これを世の人たやすからず憂へあへる様、ことわりにも過ぎたり。されど、とかく言ふかひなくて、御門よりはじめ奉りて、大臣、公卿悉く移り給ひぬ。世に仕ふる程の人、誰かひとり故郷に残り居らん。官位に思をかけ、主君の蔭を頼む程の人は、ひと日なりとも疾く移らんとはげみあへり。時を失ひ、世にあまされて期するところなき者は、愁へながら留りゐたり。軒を争ひし人のすまひ、日を経つゝ、荒行く家はこぼたれて、淀川に浮び、地は目の前に畑

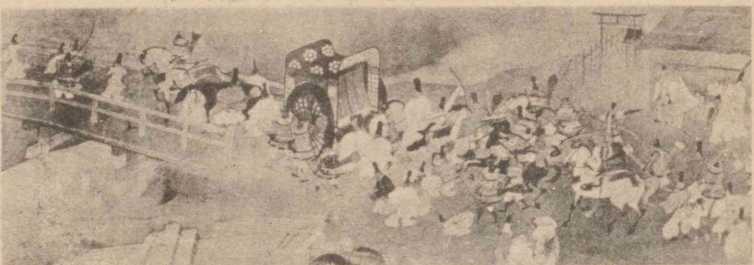
(一) 福原遷都。

(二) 第五十二代。

(三) 安徳天皇。

木の丸殿

ありとしある人
浮雲の思



都うつり伊藤龍涯筆

となる。人の心皆改りて、唯馬鞍をのみ重くす。牛車を用とする人なし。西南海の所領をのみ願ひ、東北國の莊園をば好まず。その時おのづから事の便りありて、津の國今の京に至れり。所の有様を見るに、その地程せばくて、條里を割るに足らず。北は山に沿ひて高く、南は海に近くて下れり。浪の音常にかまびすしくて、潮風殊に烈しく、内裏は山の中なれば、かの木の丸殿もかくやと、なかなかやうかはりて、優なる方も侍りき。日々には、壊ちて、川もせきあへず運び下す家は、いづくに作れるにかあらん、なほ空しき地は多く、作れる屋は少し。故郷は既に荒れて、新都は未だ成らず。ありとしある人、皆浮雲の思をなせりもとより

都の手ぶり

瑞相

この所にゐたる者は、地を失ひて憂へ、今移り住む人は、土木のわづらひある事を歎く。路のほとりを見れば、車に乗るべきは馬に乗り、衣冠布衣なるべきは直垂を著たり。都の手ぶり忽ちに改りて、ただひなびたる武士に異ならず。これは世の亂るゝ瑞相とか聞きおけるもしろく、日を経つゝ世の中うき立ちて、人の心も治らず、民の憂遂に空しからざりければ、同じ年の冬、なほこの京に歸り給ひにき。されど壞ちわたせりし家どもは、いかになりけるにか、悉くもとのやうにも作らず。ほのかに傳へ聞くに、古への賢き御代には、憐みをもて國を治め給ふ。即ち御殿(みどの)に茅をふきて、軒をだにとゝのへず、煙の乏しきを見給ふ時は、限りある貢物をさへ免されき。これは民を恵み、世をたすけ給ふによりてなり。今の世の中の有様昔になぞらへて知りぬべし。

養和の飢饉

(一) 堯帝。
(二) 第十六代仁徳天皇。

(一) 安徳天皇の御代(二八四一年)

ぞめき

なべてならぬ法

さのみやはみ
さをもつくり
あへん

あまさへ

また養和(一)の頃かとよ、久しくなりてたしかに覺えず、二年が間飢渴して、あさましき事侍りき。あるは春夏日でり、あるは秋冬大風水など、よからぬ事どもうち續きて、五穀悉く實のらず、空しく春耕し夏植うる營のみありて、秋刈り冬收むるぞめきはなし。これによりて國々の民、あるは地を捨て、境を出て、あるは家を忘れて山に住む様々の御祈始りて、なべてならぬ法ども行はるれども、更にそのしるしなし。京のならひ、何わざにつけても、源は田舎をこそ頼めるに、絶えてのぼる者なければ、さのみやはみさをもつくりあへん、念じわびつゝ、様々の寶物かたはしより捨つるが如くすれども、更に目見たつる人もなし。たまゝかふる者は金を軽くし、粟(粟)を重くす。乞食路のべに多く、憂へ悲しむ聲耳に滿てり。さきの年かくの如く、からくして暮れぬ。あくる年は立直るべきかと思ふに、あまさへ疫病(えびみ)うちそひて、まさるやうに跡形なし。

わづらひ

すべて世のありにくき事、我が身と住家とのほかなくあだなる様かくの如し。況や所により身の程に随ひて心を悩ます事舉げて數ふべからず。

若しおのづから身かなはずして權門の傍にをる者は、深く悦ぶ事はあれども大いに樂しぶにあたはず。歎ある時も、聲をあげて泣く事なし。進退安からず、起居につけて恐れをのゝく。例へば、雀の鷹の巢に近づけるが如し。若し貧しくして富める家の隣にをる者は、朝夕すぼき姿を恥ぢて、へつらひつゝ、出て入る。妻子僮僕の羨める様を見るにも、富める家の人のないがしろなる氣色を聞くにも、心念々に動きて、時として安からず。若しせばき地にをれば、近く炎上する時その害を通るゝ事なし。若し邊地にあれば、往反わづらひ多く、盜賊の難はなれ難し。勢ある者は貪慾深く、ひとり身なる者は人

すぼし
心念々に動く

たまゆら

(一)「住みわびて
我さへ軒の忍
草しのぶかた
がたしげき宿
かな二金葉集
周防内侍

たづき

に輕しめらる。寶あればおそれ多く、貧しければなげき切なり。人を頼めば身他のやつことなり、人をはごくめば心恩愛につかはる。世に従へば身苦し。また従はねばくるへるに似たり。何れの所を占め、いかなるわざをしてか、しばしもこの身を宿し、たまゆらも心を慰むべき。

我が身父方の祖母の家を傳へて、久しくかの所に住む。その後縁かけ身衰へて、忍ぶ方々しげかりしかば、終に跡とむる事を得ずして、三十餘りにして、更に我が心と一つの庵を結ぶ。これをありしすまひにならずらふるに、十分が一なり。唯居屋ばかりを構へて、はかばかしくは屋を造るに及ばず。僅かに築地をつけりと雖も、門たつるにたづきなし。竹を柱として車宿りとせり。雪降り風吹く毎に危からずしもあらず。所は河原近ければ水の難深く、白波のおそれも騒がし。



〔一〕第八十四代順
徳天皇の承久
二年(八七九年)
の頃(八八一年)
よすが
〔二〕一名小鹽山
今京都府山
城國乙訓郡
市にある。京
都の西南

すべてあらぬ世を念じすぐしつゝ、心を悩ませることは、三十餘年なり。そのあひだをりくゝのたがひめに、おのづから短き運をさとりぬ。すなはち五十の春を迎へて家を出て、世に背けり。もとより妻子なければ捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとゞめん、空しく大原山の雲にいくそばくの春秋をか經ぬる。

一六 方丈記 その三
閑居

〔三〕行人の旅宿
を造り、老叢
の獨り藪を成
す。其の住む幾
ぞ(慶滋保胤、
池亭記)

此所に六十の露消え方に及びて、更に末葉の宿りを結べる事あり。言はゞ旅人の一夜の宿りをつくり、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃の住家になずらふれば、また百分が一にだも及ばず。とかくいふ程に齡はとしくゝに傾き、住家はをりくゝにせばし。そ

〔一〕京都市伏見區
醍醐木幡山の
東北

〔三〕卷。源信僧
都の著。源信
は俗姓。源信
大和の人。源
仁元年(一一七
七)年。源信
七十六歳。源
ほども
つかなみ

の家の有様世の常にも似ず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺がうちなり。所を思ひ定めざるが故に、地を占めてつくらず。土居を組み、うちおほひをふきて、つぎめごとにかねをかけた。若し心に適はぬ事あらば、易く外に移さんが爲なり。その改めつくる時、いくばくの煩かある積むところ、僅かに二輛なり。車の力を報ゆる外は、更に他の用途いらず。今日野山の奥に跡を隠して、後に南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に闕伽棚をつくり、内には西の垣に沿へて、阿彌陀の畫像を安置しまつり。落日を受けて、眉間の光とす。かの帳の扉に普賢並びに不動の像を掛けたり。北の障子の上に小さき棚をかまへて、黒き皮籠三四合を置く。即ち和歌管絃、往生要集如きの抄物を入れたり。傍に箏、琵琶各一張を立つ。いはゆる折箏、繼琵琶これなり。東に沿へてわらびのほどもを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、此所に文机を出せり。

かけひ(寛)

觀念の便り

口業を修む

(一)京都府宇治郡
宇治村。宇治
川の東岸。

枕の方に炭櫃あり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に小地を占め、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。即ちもろくの藥草を植ゑたり。假の庵の有様かくの如し。その所の様を言はゞ、南にかけひあり、岩を疊みて水を溜めたり。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山と言ふ。正木のかづら跡を埋めり。谷しげけれど西は晴れたり、觀念の便りなきにしもあらず。春は藤浪を見る、紫雲の如くにして、西の方に匂ふ。夏は杜鵑を聞く、語らふ毎に死出の山路を契る。秋はひぐらしの聲耳に滿てり、空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪を憐む、積り消ゆる様罪障に喩へつべし。若し念佛物憂く、讀經まめならざる時は、自ら休み、自ら怠るに妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。ことさらに無言をせざれども、ひとりをれば、口業を修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなければ、境界なければ何につけてか破らん。若し跡の白波に身を寄するあしたには、岡の屋

(一)沙彌滿誓。第
四十四代元正
天皇(一三三七
五年)の御代
頃の人。
(二)潯陽江頭夜
送。客、楓葉荻
花秋瑟。白
樂天、琵琶行
(三)桂大納言源經
信。琵琶の名
手。嘉保元年
(一七五四年)
太宰權帥に貶
せられた。
(四)共に琵琶の
名曲。
あからさま

に行交ふ船を眺めて、滿沙彌が風情をぬすみ、若し桂の風葉を鳴す夕べには、潯陽の江を想ひやりて、源都督の流をならふ。若し餘りの興あれば、しばしば松の響に、秋風の樂をたぐへ、水の音に、流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を喜ばしめんとにもあらず、ひとり調べ、ひとり詠じて、自ら心を養ふばかりなり。



明 長 鴨
おほかたこの所に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今既に五とせを経たり。假の庵もやゝふる屋となりて、軒には朽葉深く、土居に苔むせり。おのづから事の便りに都の様を聞けば、この山に籠りゐて後、やんごとなき人の隠れ給へるもあまた聞ゆ。ましてその數ならぬたぐひ、盡してこれを知るべからず。たびの炎上に亡びたる家またいくそば

がうな

くぞ。唯假の庵のみ、のどけくしておそれなし。程せばしと雖も夜臥す床あり、晝る座あり、一身を宿すに不足なし。がうなは小さき貝を好む。これよく身を知るによりてなり。みさごは荒磯にをる。即ち人を恐るゝが故なり。我またかくの如し。身を知り世を知れゝば、願はず、まじらはず、唯靜かなるを望とし、愁なきを樂しみとす。それ三界は唯心一つなり。心若し安からずば、牛馬、七珍も由なく、宮殿、樓閣も望なし。今寂しきすまひ一間の庵、自らこれを愛す。おのづから都に出てては、乞食となれる事を恥づと雖も、歸りて此所にをる時は、他の俗塵に著する事をあはれぶ。若し人この言へる事を疑はゞ、魚鳥の有様を見よ。魚は水に飽かず、魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざればその心を知らず。閑居の氣味もまたかくの如し。住まずして誰かさとりん。

一七 揚雲雀

ぬれ縁やなづなこぼるゝ土ながら
鶯の身をさかさまに初音かな
なにごとぞ花見る人のなが刀

嵐 雪
其 角
去 來

應々とさへ
とたくくや
雪の門
去來



去來筆蹟

世の中は三日見ぬ間に櫻かな
雲雀より上にやすらふ峠かな
春の海ひねもすのたりゝかな
けろりくわんとして鳥と柳かな
長持に春ぞくれゆく衣がへ

蓼 太
芭 蕉
燕 村
一 茶
西 鶴

シテ 辨慶
ツレ 義經
狂言 同行 山伏
ワキ 富樫 力
狂言 富樫 力
の 從者
石川 縣 (加賀)
地名 石川 郡
富樫 左衛門 泰

一八 安宅 その一

ワキ詞かやうに候者は、加賀の國富樫の何某にて候。さても頼朝、義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿十二人の作り山伏となつて、奥へ御下向の由頼朝聞し召し及ばれ、國々に新關を立て、山伏を固く選み申せとの御事にて候。さる間、この所をば某承つて、山伏を留め申し候。今日も固く申しつけばやと存じ候。はかに誰かある。狂言詞御前に候。ワキ、今日も山伏の御通りあらば、此方へ申し候へ。狂言、畏まつて候。

ツレ次第、旅の衣は篠懸の露けき袖やしをるらん。サシ、鴻門楯破れ、都の外の旅衣、日も遙々の越路の末思ひやるこそ遙かなれ。シテ、さて御供の人々には、ツレ、伊勢の三郎、駿河の二郎、片岡、増尾、常陸坊、シテ、辨慶は先達の姿となりて、ツレ、主従以上十二人、未だ習はぬ旅

(一) 義盛。
(二) 清重。
(三) 八郎弘常。
(四) 十郎兼房。
(五) 海尊。

(一) 文治三年。
(二) これやこの行くも歸るも別れては知るも知らぬも逢坂の關、後撰集、蟬丸。
(三) 山かくす春の霞ぞ恨めしきいづれ都の境なるらん。
(四) 古今集、おと。
(五) 滋賀縣高島郡。
(六) 矢田の野に浅茅色づく有乳山峯の淡雪寒くぞあるらし。新古今集、人丸。
(七) 敦賀灣のこと。
(八) 福井縣(越前國)敦賀郡と南條郡との境にある。今は木芽峠と言ふ。
(九) 近江と越前との國境。
(一〇) 福井縣(越前國)足羽郡。
(一一) 同坂井郡。
(一二) 石川縣(加賀國)江沼郡。

姿、袖の篠懸露霜を、今日分けそめていつまでの、限りもいさや白雪の、越路の春に急ぐなり。上歌、時しも頃は二月の十日の夜、月の都を立出でて、これやこの、行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の、山隠す霞ぞ春は恨めしき、下歌、浪路遙かに行く舟の、海津の浦に著きにけり。東雲早く明けゆけば、浅茅色づく有乳山、上歌、氣比の海宮居久しき神垣や、松の木芽山、なほ行く前に見えたるは、杣山人の板取、河瀬の水の浅洲津や、末は三國の湊なる、蘆の篠原波よせて、靡く嵐の烈しきは、花の安宅に著きにけり。
シテ、御急ぎ候程に、これははや安宅の湊に御著きにて候。暫くこの所に御休みあらうずるにて候。子方、詞いかに辨慶。シテ、御前に候。子方、只今旅人の申して通りつる事を聞いてあるか。シテ、いや、何とも承らず候。子方、安宅の湊に新關を立て、山伏を固く選むところを申しつれ。シテ、言語道斷の御事にて候ものかな。さては御下向を存

じて立てたる關と存じ候。これはゆるしき御大事にて候。先づこのかたはらにて暫く御談合あらうするにて候。これは一大事の御事にて候間、皆々心中の通りを御意見御申しあらうするにて候。ツレ
 「我等が心中には、何程の事の候べき、唯打破つて御通りあれかしと存じ候。シテ暫く仰の如く、この關一所打破つて御通りあらうするは、易き事にて候へども、御出で候はんずる行末が御大事にて候。唯何ともして無異の儀が然るべからうすると存じ候。子方ともかくも辨慶計らひ候へ。シテ畏まつて候。某きつと案じ出したる事の候。我等を始めて皆々につくい山伏にて候が、何と申しても御姿隠れ御座なく候間、このまゝにては如何と存じ候。恐多き申し事にて候へども、御篠懸を除けられ、あの強力が負ひたる笈をそと御肩に置かれ、御笠を深々と召され、いかにもくたびれたる御體にて、我等より後に引下つて御通り候は、なかく人は思ひも寄り申すまじ

きと存じ候。子方げにこれは尤もにて候。さらば篠懸を取候へ。シテ
 「畏まつて候。いかに強力。狂言御前に候。シテ笈を持ちて來り候へ。狂言畏まつて候。シテ汝が笈を御肩に置かるゝ事は、なんぼう冥加もなき事にてはなきか。先づ汝は先へ行き、關の様體を見て、誠に山伏を
 選むか、またさやうにもなきか、ねんごろに見て來り候へ。狂言し
 かじか。

シテさらば御立ちあらうするにて候。誦げにや、紅は園生に植ゑても隠れなし。ツレ誦強力にはよも目をかけじと、御篠懸を脱替へて、麻の衣を御身に纏ひ、シテ誦あ
 の強力が負ひたる笈を、子方誦義經取つて肩に懸け、ツレ笈の上には雨皮あまがひ肩箱取付けて、子方綾菅笠にて顔を隠し、ツレ金剛杖にすぎり、子方足痛げなる強力にて、地よろよろとして歩み給ふ御有様ぞ傷はしき。シテ誦我等より後に引下つて御出であらうするにて候。さらば皆々御通り候へ。ツレ誦承り

候。

狂言詞いかに申し候。山伏たちの大勢御通り候。ワキ詞何と、山伏の御通りあると申すか。心得であるなう。客僧たち、これは關にて候。シテ承り候。これは南都東大寺建立の爲に、國々へ客僧を遣され候。北陸道をばこの客僧承つて罷り通り候。先づ勸に御入り候へ。

(一)藤原秀衡。

ワキ近頃殊勝に候。勸には參らうずるにて候。さりながら、これは山伏たちに限つてとめ申す關にて候。シテさてそのいはれは候。ワキ「さん候。頼朝、義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿は奥秀衡を頼み給ひ、十二人の作り山伏となつて御下向の由、その聞え候間、國に新關を立て、山伏を固く選み申せとの御事にて候。さる間この所をば某承つて、山伏をとめ申し候。殊にこれは大勢御座候間、一人も通し申すまじく候。シテ委細承り候。それは作り山伏をこそとめよと仰せ出され候。ひつらめ、よも眞の山伏をとめよとは仰せら

れ候まじ。狂言いや昨日も山伏を三人まで斬つたる上は。シテさてその斬つたる山伏は判官殿か。ワキ「あらむづかしや問答は無益。一人も通し申すまじい上は候。シテさては我等をも、これにて誅せられ候はんずるな。ワキ「なかくのこと。シテ言語道斷かゝる不祥なる所へ來懸つて候ものかな。この上は力及ばぬこと。さらば最後の勤を始めて、尋常に誅せられうずるにて候。皆々近うわたり候へ。ツレ承り候。

一九安宅その二

シテ誂いで、最後の勤を始めん。それ山伏といつば、役の優婆塞の行儀を受け、ツレ誂その身は不動明王の尊容をかたどり、シテ頭巾といつば、五智の寶冠なり。ツレ十二因縁のひだをすゑて戴き、シテ九會曼茶羅の柿の篠懸、ツレ胎藏黑色の脛巾を穿き、シテさてま

た八目の草鞋は、シテ八葉の蓮華を踏まへたり。シテ出て入る息に阿吽の二字を稱へ、ツレ即身即佛の山伏を、シテ此所にて討ちとめ給はん事、ツレ明王の照覽計り難う、シテ熊野權現の御罰の當らん事、ツレ立所において、シテ疑あるべからず。地庵阿畏羅吽欠と、數珠さら／＼と押しもめば、ワキ詞近頃殊勝に候。先に承り候ひつるは、南都東大寺の勸進と仰せ候間、定めて勸進帳の御座なき事は候まじ。勸進帳をあそばされ候へ。これにて聽聞申さうずるにて候。シテ何と、勸進帳を讀めと候や。ワキなか／＼のこと。シテ心得申して候。

シテ詞もとより勸進帳はあらばこそ、笈の中より往來の、卷物一卷取出し、勸進帳と名附けつゝ、誦高らかにこそ讀上げけれ。それ熟惟れば、大恩教主の秋の月は、涅槃の雲に隠れ、生死長夜の長き夢驚かすべき人もなし。茲に中頃みかどおはします。御名をば聖武皇帝

(一)第四十五代。

と名附け奉り、最愛の夫人に別れ、戀慕やみ難く、涕泣眼に荒く、涙玉を貫く思を、善途に翻して、廬舍那佛を建立す。斯程の靈場の絶えなん事を悲しみて、俊乗坊重源諸國を勸進す。一紙半錢の奉財の輩は、



勸進帳

この世にては無比の樂に誇り、當來にては數千蓮華の上に坐せん。歸命稽首、敬つて白す。』と、天も響けと讀上げたり。ワキ誦關の人々肝を消し、地恐をなして通しけり。ワキ詞、急いで御通り候へ。シテ詞承り候。

狂言詞いかに申し上げ候。判官殿の御通り候。ワキ誦いかにこれなる強力とまれとこそ。ツレ誦すは我が君を怪しむるは、一期の浮沈極りぬと、皆一同に立歸る。シテ詞あゝ暫くあわて、事をし損ずな。

一期の浮沈

落居の間

やあ何とてあの強力は通らぬぞ。ワキ詞あれは此方よりとめて候。シテそれは何とて御とめ候ぞ。ワキあの強力がちと人に似たると申す者の候程に、さてとめて候よ。シテ何と、人が人に似たるとは、珍しからぬ仰にて候。さて誰に似て候ぞ。ワキ判官殿に似たると申す者の候程に、落居の間とめて候。シテや、言語道斷判官殿に似申したる強力めは、一期の思出な、腹立ちや、日高くは能登國まで指さうずると思ひつるに、僅かの笈負うて後にさがればこそ人も怪しむれ。總じてこの程につくし憎しと思ひつるに、いで物見せてくれんとて、金剛杖をおつ取つて、さんぐに打擲す。通れとこそや、笈に目をかけ給ふは、誦盗人さふな。ツレ誦方々は何故に、斯程賤しき強力に、太刀、刀を抜き給ふは、めだれ顔のふるまひは、臆病の至かと、十一人の山伏は、打刀抜きかけて勇みかゝれる有様は、いかなる天魔鬼神も、恐れつべうぞ見えたる。ワキ詞近頃あやまりて候。はや、御通

めだれ顔

り候へ

シテ詞先の關をば早拔群に程隔りて候間、この所に暫く御休あらうずるにて候。皆々近う御参り候へ。いかに申し上げ候。さても只今は餘りに難儀に候ひし程に、不思議の働を仕り候事、誦これと申すに、君の御運盡きさせ給ふにより、今辨慶が杖にも當らせ給ふと思へば、愈、あさましうこそ候へ。千方詞さては悪しくも心得ぬと存ず。いかに辨慶、さても只今の機轉、更に凡慮よりなす業にあらず。唯天の御加護とこそ思へ。誦關の者ども我を怪しめ、生涯限りありつる所に、とかくの是非をばもんだはずして、唯眞の下人の如く、さんざんに打つて我を助くる、これ辨慶が謀にあらず、八幡の地御託宣かと思へば、忝くぞ覺ゆる。クリそれ世は末世に及ぶと雖も、日月は未だ地に落ち給はず。たとひいかなる方便なりとも、正しき主君を打つ杖の、天罰に當らぬ事やあるべき。千方サシげにや現在の果を見て、

凡慮

過去未來を知ると言ふ事、地今に知られて身の上に、憂き年月のきさらぎや、下の十日の今日の難を、遁れつるこそ不思議なれ。子方唯さながらに十餘人、地夢の覺めたる心地して、互に面を合せつゝ、泣くばかりなる有様かな。クセ然るに義經、弓馬の家に生れ來て、命を頼朝に奉り、屍を西海の浪に沈め、山野海岸に起き臥し、明す武士の鎧の袖枕、片敷く隙も波の上、或時は舟に浮み、風波に身を任せ、或時は山脊まへの馬蹄も見えぬ雪の内に、海少しある夕波の、立ち來る音や須磨明石の、とかく三年の程もなく、敵を亡し靡く世の、その忠勤も徒に、成果つるこの身の、そも何と言へる因果ぞや。子方謠げにや思ふ事、かなはねばこそ憂世なれと、地知れども流石なほ、思ひ返せば梓弓の、すぐなる人は苦しみて、讒臣はいやましに世にありて、遼遠東南の雲を起し、西北の雪霜に責められ埋る憂き身を、ことわり給ふべきなるに、唯世には神も佛もましまさぬかや。恨めしの憂世

や、あら怨めしの憂世や。

聊爾

ワキ詞、いかに誰かある。狂言詞、御前に候。ウキ、さても山伏たちに聊爾を申して、餘りに面目もなく候程に、追つつき申し、酒を一つ參らせうずるにてあるぞ。汝は先へ行きてとめ申し候へ。狂言畏まつて候。いかに申し候。さきには聊爾を申して、餘りに面目もなく候とて、關守のこれまで酒を持たせて參られて候。シテ詞、言語道斷の事やがて御目に懸らうずるにて候。狂言しかく。

シテ詞、げに〜これも心得たり。人の情の杯に、うけて心を取らんとや。これにつきて、なほ〜人に、謔心なくれそ吳織、地怪しめらるな面々と、辨慶に諫められて、この山陰の一宿ひととせに、さらりと圓居まきかして、所も山路の菊の酒を飲まうよ。シテ謠、面白や山水に、地杯を浮めては流うに引かるゝ、曲水の、手先づ遮る袖ふれて、いざや舞を舞はうよ。もとより辨慶は三塔(一)の遊僧、舞延年(二)の時の和歌。これなる山水の落

(一)比叡山には東塔西塔、横川とて塔三つあり、辨慶はそこで居つた。
(二)藝の上手な僧。
(三)法會の後に僧侶が餘興として種々の歌や踊や劇を演じ、て見せたもので、寺の庭などで行はれた。

ちて巖に響くこそ、地鳴るは瀧の水。

シテ詞たべ酔ひて候程に、先達御酌に參らうずるにて候。ワキ詞さ
らばたべ候べし。とてもものに、先達一さし御舞ひ候へ。地謠鳴るは
瀧の水。シテ鳴るは瀧の水。地日は照るとも、絶えずとうたり。絶えず
とうたり。ワカとくく立てや手束弓の、心ゆるすな關守の人々。暇
申してさらばよとて、笈をおつ取り肩にうち懸け、虎の尾を履み毒
蛇の口を遁れたる心地して、陸奥國へと下りけり。

二〇 強い精神の勝利

永井 潜

(一) 心身不二の
元論で、精神が主體
であるとする見
学説。

(一) 精神的一元論の見地から考へると、精神が身體の上に偉大な力
を及す事は、寧ろ當然過ぎる程當然の事てなければならぬ。
人間は病氣に罹ると種々煩悶する。殊に念一たび死の運命に想
到して、その恐怖に囚はれると、病を一層悪化せしめるやうな事は、

泰然自若

(一) 朱熹。宋代の
大儒。文公と
諡する。

不幸にして甚だ屢見る事實である。昔から病は氣からと言ふやう
に、病氣に罹つた際には、自己の運命に安んじ、泰然自若たる不動心
が最も大切である。この不動心があつてこそ、始めてよく病を征服
する事が出来るのである。

(一) 朱晦庵の言つた「陽氣の發するところ金石もまた透る。精神一到、
何事か成らざらん」といふ語は、誰しも知つてゐるところであるが、
實際精神一到せば、いかなる事でも成就し得ないものはない。その
昔、赤穂義士討入の宵に、其角が「我が雪と思へば、輕し笠の上」と歎賞
した時、「日の恩やたちまち碎く厚氷」と大高源吾の子葉が酬いた事
は、今も尙ゆかしい語草になつてゐるが、その俳人子葉は「何のその
岩をもとほす桑の弓」と吟じてゐる。げに一念の凝る時、將軍の矢は
よく岩をもとほす事が出来るのである。

觀音經には「念力さかなれば、火に逢うても焼けず、水に入つて

(二) 李廣。漢の文
武二帝に仕へ、
射を善くした。

である。鋭い刃はとかくこぼれ易い。少しく蹉跌せんか、失望落膽する危険が伴なふのであるが精神の強い堅忍不拔な人は、いかなる事があつても必ず成功しなければ止まない。古へより成功の條件として運、鈍根の三つを教へたのは、誠に故ありと言ふべきである。強い意志はあらゆる行爲に熱と力とを與へて、これを活躍せしめるものである。

強い精神の前には、何者も胃を脱いでひれ伏すのである。努力し尙努力す——これぞ人生なる。さうしてこの努力すべき人生に、痛い鞭となり、甘い林檎となり、これを激勵し、これを鼓舞せしめるものは、實に不撓不屈の強い精神でなければならぬ。

將士の強い精神が戦争に勝利をもたらす事は言ふまでもないが、これによつて國家を果卵の危きに救ひ、社稷を磐石の安きに置いた例證は、東西古今決して少くない。(一)ペルシヤ王クセルクセスが、八

(一)波斯。
(二)西紀前五一九年—四六五年。

(一)在位西紀前四九〇年—四八〇年。
(二)ギリシヤ國マリス、ロクリスの兩地方の境にある狹路。

肉迫する

十萬の大軍を率ゐてギリシヤに殺到した時、スパルタ王レオニダスは手兵僅かに三百、友軍を合せて六千足らずの寡兵を以て、テルモピレ一の險を死守した。地勢がいかに要害であるとは言へ、殆ど二百倍に相當する大軍に當らうとするその壯烈な意氣には、流石のペルシヤ王も心中懼をなして、寧ろ戦はずして敵を屈するの策を立て、軍使をレオニダスの陣營に送つて言ふやう、「我が軍の放つ矢は天日を覆うて直ちに汝の軍を塵殺せん。如かず、速に降服せんには」と。その時、賢明剛勇なスパルタ王は、莞爾として答へていはく、「よし、さらば余は天日暗きその蔭に隠れて、汝の陣營に肉迫せんのみ」かくて戦の幕は開かれた。愛國の熱誠に勇氣千倍せるギリシヤの軍勢は、幾たびか寄手を惱まし、眞に屍山血河の悲愴な奮闘をしたが、衆寡終に敵せず、あはれ名君レオニダスをはじめとして、忠勇の士悉くテルモピレ一の露と消果てた。

(一) スバルタ人を指す。

(二) アツチカ半島とサラミス島の間にある。

ギリシャの武人が外にあつてかくも崇高な勳功を國家の爲に樹てつゝあつた間に、スバルタに於ける政治家の態度は、因循姑息黨を立て牆にせめて、國家の大事を忘れてゐた。テルモピレの戰場に立てられた碑に、

「旅人よ、我等が永遠に此所に留る事を、ラケデーモンの人々に告げよ。我等は死に至るまで、卿等の命ずるまゝに忠實であつた」といふ句が鐫られたのを見ても、時人がいかにこの誠忠無二の英魂を景仰し痛惜したか、はたまた固陋頑迷な政治家を非難したかを、想見する事が出来るのである。レオニダス王はかくして死んだ。しかも彼の強い精神は護國の鬼となつて、名將ヘロフィロスを激勵し、都を奪はれて海に浮んだアテネ人を加護して、サラミス灣頭の決戦にペルシャの艦隊を撃破し盡し、強敵をして一敗地に塗れて再び起つ能はざらしめたのである。

(一) イギリスの提督(一七八五年) ○五年(一七八五年) (二) イギリスの政治家(一七八五年) (三) フランスの女傑(一七八五年) (四) フランスの母(一七八五年) (五) フランスの難を救つた(一七八五年) (六) 鎌倉幕府第八代(一七八五年) (七) 頼朝の子(一七八五年) (八) 青史(一七八五年) (九) 竹帛に垂れる(一七八五年) (一〇) 孫成吉思汗(一七八五年) (一一) 孫(一七八五年) (一二) 第九十代(一七八五年) (一三) 返牒(一七八五年)

英のネルソン及びウエリントン、米のワシントン、佛のジャンダークなどが、何れも皆一身を以て國家の安危に任じた事は、事新しく言ふまでもないであらう。

我が國の歴史のうちにも、かういふ事例は少くはないが、殊に肇國以來未曾有の國難に際會して、剛勇果斷毅然として起つてこれに當り、御稜威を八紘に輝かし、國運を萬世に繋いだ北條時宗の勳功に至つては、青史に宣揚し、竹帛に垂れ、永世忘れる事の出来ないものがある。

史を按ずるに、元主忽必烈が父祖の餘威を挾み、曠世の大望を懷いて我が國を併呑せんとした事は、實に執拗深刻を極めたのである。即ち龜山天皇の御宇、文永三年、黒明股弘を國信使として我が國に差遣したのをはじめとして、同五年及び六年相次いで使を以て我に迫つた。朝廷では軟派が勝を占め、既に返牒を草して鎌倉幕府

に示された程であつたが、時宗は蒙古の傲慢無禮を憤り、返牒を抑へてこれを遣さず、同八年に四度蒙古の使が來た時にも、幕府は斷乎として朝廷の返牒を握りつぶした。九年と十年とに來た五度六度の使をも、すげなく追還した。

是に於てか蒙古王は終に怒つて、十一年十月に船艦九百餘艘、蒙古軍二萬五千、高麗軍八千人を以て先づ對馬を侵し、守護代宗助國(一)がこれに死んだ。賊は轉じて壹岐に寇し、守護代平景隆が力戰して死んだ。勝誇つた賊はこの兩島に入つて、殘虐悽愴、言ふに忍びざる暴行を敢へてし、進んで肥前の松浦から、十九日太宰府に迫つた。太宰少貳景資が奮戰これを防いだ、がなか／＼思ふに任せなかつた。然るに二十日夜大暴風が起つて、賊船の漂流するもの二百餘艘、溺死者一萬三千五百餘、さん／＼の敗北となつた。

次いで後宇多天皇の(二)建治元年に、元主は執念深くも杜世忠、何文

(一) 對馬國の領主、知宗の子、文永十一年、九三四年、元兵と對馬の小茂田に戰つて死んだ。

(二) 第九十一代、四一九三五年。

(一) 神奈川縣、相模國、鎌倉郡、片瀬町、片瀬、龍口寺の地、鎌倉幕府當時の刑場。

著等を遣して、重ねて修好を求めた。時宗はこれを鎌倉に檻致させ、召見してその無禮を責め、世忠等五人を龍口(一)に斬つた。さうして大いに國防を嚴にし、公私の費用を節減し、ひたすら戰備を充實するに力めると共に、國民の士氣を鼓舞して、この空前の國難に備へた。また諸社寺には祈禱が行はれ、國難來の聲は期せずして津々浦々に響きわたり、國を擧げてこの大難を攘はんとする鬱勃たる元氣が涌立つた。實にこの時程我が大和民族の士氣が緊張した事は、曾てなかつたのである。

(二) 弘安二年になつて、元主は更に夏貴等四五の重臣を太宰府に送つて、交通を強要した。時宗は令してまたこれを博多に斬らしめた。そこで元主は大いに怒つて、弘安四年五月、范文虎等を將として、兵十餘萬別に高麗兵二萬五千人を率ゐて入寇させた。急報は櫛の齒を引くやうに鎌倉に至り、實に我が國は今や危急存亡の岐路に置

(一) 一九三九年。

櫛の齒を引く

官幣大社日吉
神社滋賀縣
比叡郡坂本村
に奉じ身を以て國難に代らんと祈らせ給うたのである。六月賊は平戸に迫つたが、我が軍がよく防いだので、賊船は近附く事が出来なかつた。勇士草野七郎、河野通有、菊池武房、竹崎季長等が奮闘して大和武士の手並を示し、敵の膽を寒からしめたのは實にこの時であつた。さうして閏七月一日に、神風が俄に起つて海濤怒號し、虜艦皆覆り、溺死する者算なく、海中歩いて渉るべしといふ有様であつた。これがいはいゆる弘安の役であつたのである。

かかれたのである。畏くも龜山上皇には親しく石清水に祈られ、次いで春日及び日吉社へ御幸せられ、また御手書の願文を伊勢の神宮に奉じ、身を以て國難に代らんと祈らせ給うたのである。六月賊は平戸に迫つたが、我が軍がよく防いだので、賊船は近附く事が出来なかつた。勇士草野七郎、河野通有、菊池武房、竹崎季長等が奮闘して大和武士の手並を示し、敵の膽を寒からしめたのは實にこの時であつた。さうして閏七月一日に、神風が俄に起つて海濤怒號し、虜艦皆覆り、溺死する者算なく、海中歩いて渉るべしといふ有様であつた。これがいはいゆる弘安の役であつたのである。

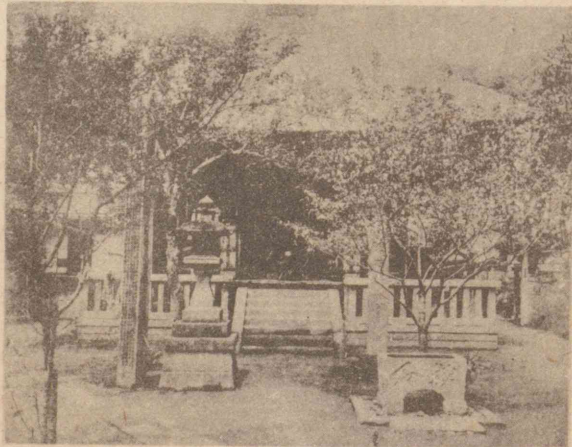
敵愾
頼山陽の「蒙
古來」と題す
る詩中の句。

かく文永、弘安前後兩回の侵入に當つて、その都度颶風が起つて虜艦を全滅させた事は、決して偶然とは思はれないのである。即ち神明の加護と、皇威の赫々と、國民の敵愾と相俟つて、よくこの國難を掃攘する事が出来たのであらうが、しかも我が相模太郎膽甕の

秕政

善處する

如く、敢然として外侮を禦ぎ、内政を統御し、鐵心石腸、凜乎として天下を負つて起つた概があつた爲に、よく國運を傾危のうちに至うする事が出来たのであつて、その功績によつて言へば、蓋し日本肇國以來の第一人者と言ふべく、北條氏によつて行はれた幾多の秕政も、優に時宗のこの一大勳功によつて償つて餘りある事と思ふ。國難來、國難來、我等は永久にこれを繰返して叫ぶ必要がないだらうか。今の日本を思ひ、將來の大和民族を念ひ、さうして七百年の昔に於て、我等の祖先がかくも強い精神を以て國難に善處し、皇運をして益、隆興せしめ、國威



北條時宗廟

を宣揚した事を追憶する毎に、私には唯熱い涙が涌く。

——人及び人の力——

帝國實業讀本 改制新版 卷八 終

附
録

一 敬讓語(口語)

一 敬讓の意を含む文語動詞

一 國語假名遣一覽

敬讓語(口語)

一名詞

(甲) お年 お顔 お宅 お歸り お休み おいくつ
おいくたり お一つ お十一 御返事 御挨拶

御機嫌 御本

(乙) 神さま 井上さん 太郎君

(丙) お母さま お弟さん 御尊父さま

二人代名詞

| 自稱 | 對稱 | 他稱 | 不定稱 |
|------|-------|---------|---------|
| わたくし | あなたさま | この(お)かた | どの(お)かた |
| わたし | あなた | その(お)かた | どなたさま |
| | | あ(お)かた | どなた |

三動詞

(甲) 本來の敬讓語 (○印は連語を示した)

あがる・召しあがる(食フ、飲ム)

敬讓語(口語)

あそばす・なさる(爲ル)

いらしやる(來ル、行ク、居ル)

おしやる(言フ)

おぼしめす(思フ、考ヘル)

くださる(與ヘル)

見える(來ル、居ル)

めす(呼ブ、着ル、穿ク、乗ル、買フ)

〔以上、尊敬の意を含むもの〕

○お出でになる、お出でなさる(來ル、行ク、居ル)

あがる、參上する(訪ネル、行ク)

あげる、さしあげる(與ヘル)

いたす、つかまつる(爲ル)

いただく、頂戴する(貰フ、食フ、飲ム)

うかがふ(聞ク、訪ネル)

ございます(居ル、有ル)

存する、存じ上げる(知ル)

たべる (食フ)

申す、申上げる (言フ)

まゐる (行ク、來ル)

拜見する (見ル)

拜借する (借リル)

拜讀する (讀ム)

拜聽する (聞ク)

○お目にかかる (面會スル)

お目にかける、

御覽に入れる (見セル) (以上、へり下る意、)

(乙) 敬讓動詞のつくり方 (○印は連語を示した)

遊ばす
なさる
下さる
に、なる

遊ばす
なさる
下さる
に、なる

○見て下さる、讀んで下さる (以上、尊敬の意を含むもの)

お届け
申す
申上げる
致す

お供
申す
申上げる
致す

○お届けする、お供する (以上、へり下る意のもの)

(丙) 尊敬の意の添へ方 (助動詞「れる」「られる」を附ける)

父は英書も讀まれる。

今日は佐藤君も來られる

(丁) 丁寧の意の添へ方 (助動詞「ます」を附ける)

先生も仰つしやいます。

私からも申上げます。

先生もお歌ひになります。

私もお供致します。

紙が飛びます。

四 形容詞

(甲) 「お」を附ける。

こんなにお暑いのに……………。

六 副詞

おまめにお働きなさいませぬ。

ごゆつくりなさいまし。

ここはお静かではございません。

七 「で、ある」「だ」の意

助動詞「です」、連語「でございます」「なをを
用ひる。

あれは學校です。

あれは學校で ございます。

あのかたは先生で いらつしやいます。

大將はその時、少將で お出でになつた。

五 形容動詞 (「お」「こ」を附ける)

それはお珍しからう。

若しお寒かつたら……………。

あそこはお静かです。

あそこはお静かでしたか。

そんなにご丈夫なら、もう安心ですね。

ご丁寧な御挨拶で痛み入ります。

(乙) 「です」「でございます」を附ける。

これは古さ(の)です。

これは新しうでございます。

それはお高さ(の)です。

それはお珍しうでございます。

敬讓の意を含む文語動詞

(甲) 尊敬の意を含む語

あそばす(爲ル)
 います、ます、まします(アル、居ル、行ク、來ル)
 おはす、おはします(同前)
 おほす(言フ、言ヒツケル)
 おぼす、おぼしめす(思フ)
 きこしめす(聞ク、飲ム、食フ)
 しろしめす(知ル、統べ治メル)
 たてまつる(著ル、乗ル)
 たまふ、たぶ(與ヘル)
 のたまふ(言フ)

(乙)

まゐる(飲ム、食フ、著ル)
 みそなはす(見ル)
 めす(飲ム、食フ、著ル、乗ル)
 わたる(アル、居ル)
 へり下る意、丁寧の意を含むもの
 いたす、つかまつる(爲ル)
 うけたまはる(聞ク、承諾スル)
 さふらふ(アル、居ル)
 きこゆ、まうす(言フ)
 たてまつる、まゐらす(與ヘル)
 たまはる(貰フ、受ケル)
 はべり(アル、居ル)
 まかる(退ク、歸ル、行ク)
 まゐる(行ク)

國語假名遣一覽

| | | | | | |
|-------|--|---|---|--|---|
| わ (は) | わ (輪) くちわ(口輪) おほわ(大輪) おもわ(面輪) はにわ(埴輪) わ(廊) くるわ(廓) わ(曲) うらわ(浦曲) いそわ(磯曲) あわ(沫) あわもり(泡盛) みなわ(水沫) わ(分) いひわけ(言分) ことわけ(辭分) おひわけ(追分) のわ(野分) わけがら(譯柄) ひきわけ(引分) わた(綿) | わた(腸) はらわた(腸) このわた(海鼠腸) こわ(聲) こわい(聲色) こわね(聲音) こわづかひ(聲遣) こわづくろひ(聲づくろひ) こわだか(聲高) わざ(業) しわざ(仕業) ことわざ(言葉—諺) わり(割) ことわり(事割—理) しわ(皺) ひわ(鵞) たわら(俵) いわし(鰯) あわつ(周章) たわし(束藁子) くわわ(慈姑) たわやか(婢娟) たわやめ(手弱女) たわむ(撓む) | よわし(弱し) かわく(乾く) さわぐ(騒ぐ) すわる(坐る) あわたし(惶し) さわやか(爽か) たわいなし | 語の中や下に來る「わ」は右に 舉げた他は「は」を用ひる。例 (ば) 川 澤 粟 瓦 庭 桑 譚 安 永 繩 障 廻 變 かはいら し 等 | おで(井手—堰) おなか(井中—田舎、田園) おもり(井守—蠨蛸、鯉) お(居) あさり(居去—膝行) かも(鴨居) しき(敷居—闕) くも(雲居) くら(座居—位) との(殿居—宿直) まと(本居—基) ま(ある(目居る—參る、詣る) の 猪(いのしし) いのこ(亥の子—豚) いぬ(猪首) いぬ(戌亥—乾) お(亥) ひき(率) ひき(引率—率る、將 もち(ある(持率る—用、以) お(蘭) おほ(大蘭) おぐ(蘭草) |
|-------|--|---|---|--|---|

いさせし(續一動)
 ばせせ(芭蕉)
 みさせ(操)
 やまら(徐)
 たまやめ(手弱女)
 をとり(囀)
 をかす(犯す)
 をがむ(拜む)
 をどす(威す)
 をす(食す)
 をさむ(治む)
 をさむ(納む)
 をさむ(藏む)
 をしむ(惜しむ)
 をしむ(教ふ)
 をふ(終ふ)
 をはる(終る)
 をめく(叫く)
 をのく(戦く)
 をどる(踊る一躍、鬨)
 をる(居る)
 あをむく(仰く)
 かをる(香る一薫)
 まます(申す)
 しをる(撓る)
 をかし(可笑し)
 をし(愛し一惜)
 くちをし(口惜)
 をさなし(幼し)

さを(竿)
 つりざを(釣竿)
 みざを(水竿一棹)
 うま(魚)
 いま(水魚)
 しらを(白魚)
 いまのめ(魚の目一眈)
 かつを(鯉)

右の外、上には「お」を用ひ、中下には「ほ」を用ひる。例へば

親 沖 弟 鬼 祖父 驚
 遅く 恐し 等
 顔 鹽 潮 火の穂(焰)
 水 郡 蟋蟀 透る 滯る
 直し 速し 通す等

中下に「ふ」を用ひ、文語では轉呼音で「お」と發音するものがある。例へば

問 思 買 添
 願 貰 拾 習
 訪 沿 乞 扱
 害 違 誘 纏
 事 拂 叶 憂

ち(父)
 おほち(祖父)
 をち(伯父一叔父)
 ちち(祖父)
 ちち(老翁)
 ちちむさし(小父)
 すち(筋)
 うち(氏)
 ち(路)
 こうち(小路)
 ひち(肘)
 あち(味)
 あち(鱈)
 かち(棍)
 かち(楮)
 かち(櫛)
 ひち(泥)
 ふち(藤)
 ふちばかま(藤袴)
 かうち(麴)
 くちら(鯨)
 ことち(琴柱)

候ふ 扇ぎ
 近江 今日 仰ぐ 葵
 し 尊ぶ等 今日 昨日 倒る 貴

ねち(銀)
 わらち(草鞋)
 なんち(汝)
 なめくち(軸艇)
 もみち(紅葉)
 はち(耻)
 あちな(蒲公英)
 ふち(紫陽花)
 みそち(三十)
 よそち(四十)
 いそち(五十)
 むそち(六十)
 かちめ(搦布)
 ちちむ(縮む)
 ねち(捻る)
 とち(閉ぢる)
 とち(綴ぢる)
 はち(耻ぢる)
 よち(攀ぢる)
 ひち(濡ぢる一泥)
 もち(振ぢる)
 ねち(倅る)
 あち(味ふ)

「ち」を用ひるのは右の語だけで、他は「じ」を用ひる。例へば

虹 雉 籤 脚躑 交る
 詰る 辱し 著し 等

ず (つ)

かす(敷)
 きす(傷)
 くす(葛)
 ゆはす(筍)
 もす(鴟一舌鳥)
 みす(蚯蚓)
 はす(機)
 ねす(鼠)
 あんす(杏)
 すず(鈴)
 すずむし(鈴蟲)
 すずき(鱸)
 すずな(菘)
 すずしろ(大根)
 すずめ(雀)
 すずし(生絹)
 すずろ(漫)
 すず(數珠)
 すさ(從者)
 ずはえ(條)
 いしずえ(礎)
 くず(國栖)
 こずえ(梢)
 かならず(必ず)
 たたずむ(行む)

なすらふ(準ふ)
 ひずむ(歪む)
 すずし(涼し)
 すずり(硯)
 ます(交す一混)
 ゆず(柚子)

右の他は「じ」を用ひる。例へば

水 屑 泉 雷 酸漿 渦
 煩 負 續 かす
 らふ等

佐野製本

昭和七年十一月一日印
 昭和七年七月二十日訂正再版發行
 昭和八年九月十五日訂正三版發行
 昭和十六年九月三日訂正七版印刷
 昭和十六年九月七日訂正七版發行
 昭和十二年三月廿三日訂正四版發行
 昭和十二年七月十三日訂正五版發行
 昭和十二年十一月十八日訂正六版印刷
 昭和十二年十二月廿一日訂正六版發行

價定

卷一—卷六 金六拾錢
 卷七·卷八 金五拾四錢
 卷九·卷十 金五拾壹錢



版新制改 本讀業實國帝

| | |
|-----|----------|
| 編者 | 芳賀 |
| 訂補者 | 田賀 |
| 同者 | 長谷川 |
| 發行者 | 富山 |
| 代表者 | 坂本 |
| 印刷所 | 精版印刷株式會社 |

會社資
 東京市神田區神保町一丁目三番地
 大阪府西淀川區海老江上四丁目二十三番地

發行所

會社資

山

房

東京市神田區神保町一丁目三番地
 電話神田二七一—二七八番振替口座東京〇一〇一

東京
海軍
西

広島市立第一商業学校四年東組

四年東組

四年東組

四東

遠藤昌

遠藤昌

4早

十七

神の代り

日本の本

國のつとめ

立

四東

遠藤昌

広島大学図書

2000026462

